

東京大学大学院新領域創成科学研究科  
社会文化環境学専攻

2021 年度  
修 士 論 文

立川でウドを作る：継承財としての農業空間  
(Cultivating Udo in Tachikawa, Tokyo:  
Agricultural Space to Inherit Urban Agriculture)

2022 年 1 月 17 日提出  
指導教員 福永 真弓 准教授

澤登 芳秋  
Sawanobori, Yoshiaki

## 目次

第1章 研究背景と目的 .....	1
第1節 問題の所在 .....	1
第1項 都市農業の現在 .....	1
第2項 都市農家と農業継続 .....	2
第3項 継承されるものは何か .....	3
第2節 研究の手法 .....	4
第3節 本論の構成 .....	6
第2章 東京うどという品種 .....	7
第1節 ウド .....	7
第2節 東京への栽培導入期(1800年代初期～1900年代初期) .....	8
第1項 導入 .....	8
第2項 品種・栽培方法 .....	9
第3項 産地 .....	9
第3節 産地拡大期Ⅰ（1800年代後半～1925年頃） .....	10
第1項 品種 .....	10
第2項 産地 .....	10
第3項 栽培方法・技術 .....	11
第4項 出荷 .....	12
第4節 産地拡大期Ⅱ（1925年～1945年頃） .....	12
第1項 品種 .....	12
第2項 産地 .....	13
第3項 栽培方法・技術 .....	13
第4項 出荷 .....	14
第5節 戦後最盛期（1945～1970年頃） .....	14
第1項 品種 .....	14
第2項 産地 .....	14
第3項 栽培方法 .....	15
第4項 栽培技術 .....	17
第5項 出荷 .....	18
第6節 逡減期(1970年末～1990年頃) .....	19
第1項 品種 .....	19
第2項 栽培方法・技術 .....	19
第3項 産地・出荷 .....	20
第7節 小括 .....	20

第3章 ウドの街 立川 .....	22
第1節 概要 .....	22
第2節 東京うど .....	23
第4章 ウドとくらす .....	25
第1節 はじまり .....	26
第2節 継ぐ .....	26
第3節 極める .....	28
第4節 安定とギャンブル性 .....	29
第5節 変化 .....	30
第6節 変える .....	31
第7節 東京うどを作り続ける .....	33
第8節 小括 .....	34
第5章 東京うどをつくる .....	36
第1節 栽培から出荷までの流れ .....	36
第2節 4月～11月：養成 .....	38
第1項 定植（東京圃場） .....	38
第2項 定植～掘り取り（群馬圃場） .....	39
第3節 11月～3月：ウドムロ軟化 .....	40
第1項 ウドムロの構造 .....	40
第2項 根株の調整 .....	41
第3項 伏せ込み準備（泥入れ） .....	43
第4項 伏せ込み .....	43
第5項 生育確認 .....	45
第6項 収穫・出荷 .....	46
第4節 12月～4月：種株準備 .....	47
第1項 刈り取り（東京圃場） .....	47
第2項 掘り取り（東京圃場）・種株作り .....	47
第5節 小括 .....	48
第6章 都市農業をつづける .....	49
第1節 都市農地・農業に関する制度の変遷 .....	49
第2節 農地減少という「宿命」 .....	51
第3節 小括 .....	53
第7章 東京うどがひろがる .....	54
第1節 ウドラ .....	54
第2節 市内非ウド農家 Sn .....	57
第3節 立川市 .....	58

第4節 小括 .....	59
第8章 東京うどをつなぐ .....	60
第1節 将来へ .....	60
第2節 継承された三島独活（大阪府） .....	62
第3節 小括 .....	64
第9章 考察・結論 .....	65
第1節 総括 .....	65
第2節 ウドムロという継承財 .....	67
第3節 都市農家によって都市農業を残す .....	69
参考文献 .....	71



## 第1章 研究背景と目的

### 第1節 問題の所在

#### 第1項 都市農業の現在

近年、都市農業<sup>1</sup>はますます重要性を増している。

1950年代半ば以降、人口増加や産業集中によって都市地域の住宅需要は急速に拡大した。開発の対象となった都市部の農地の多くは、都市地域の合理的な開発を目指した新都市計画法(1968)のもと、優先的に市街化を進めるべき区域(市街化区域)に指定された。その後、宅地需要は一時落ち着いたものの、1980年代半ばには市街化区域の地下高騰問題が再燃した。

改正生産緑地法(1991)が制定されると、当時残存していた農地は生産緑地と宅地化農地に分類され、後者の開発が進行した。また前者に対しては、30年間の生産緑地の管理義務が課され、農地として保全された。しかし、管理義務期間後には、市町村長への買取申請を経て、公共用地として利用することが示されていた(宮地 2006)。農地そのものを評価して農業の継続を目指す施策とは言い難く、都市化が一層進んだ。このように、都市化と農業の継続は長い間競合関係にあり、都市農地は大方不要なものとしてきた。

転機が訪れたのは2015年である。この年に施行された都市農業振興基本法では、都市農地の多面的機能が評価され、積極的な有効活用と保全の必要性が明記された。これによって、農地は都市に「あるべきもの」という考えが広がってきた。本法では、身近な農地から新鮮で安心安全な農作物が手に入るといった食料供給機能が明記された。加えて、防災機能、良好な景観形成の機能、国土・環境の保全の機能、農作業体験・学習・交流の場を提供する機能、農業に対する理解の醸成の機能という機能が記された。これらは、良好な都市環境を形成する上で重要な機能であり、都市に農地があることが、良好な都市環境であるために必要だという認識が示されている。特に、昨今の新型コロナウイルス感染症禍においては、身近な都市域に農地というインフラが備えられることの必要性がより鮮明となっている。

しかし、農業を継続していくことは簡単ではない。日本農業は長らく多数の零細家族経営農家によって維持されてきたが、都市農業においても農業従事者の高齢化や後継者不足は深刻である。農地の減少も続いており、農家のみで維持していくのは困難な状況にある。これらの問題に対して制度面においては、担い手確保のため、食品やITベンチャーなど企業に対しても参入を奨励し、規制緩和を行なってきた。また、農地の集積、集約化によって生産基盤を整え、経営の底上げを行い、さらにスマート農業、デジタルトランスフォーメーションなどによって効率化を図ることで農業を成長産業にしていくことを目指す政策が進められている。端的に、企業的経営によって農業を発展、存続させていくことを標榜している

---

<sup>1</sup> 本論での都市農業は、都市農業振興基本法(2015)の定義に則り、市街地及びその周辺において行われる農業とする。

と言えるだろう。

一方で、異なるアプローチから農業を存続させようという動きもある。流通や消費に工夫をして、国内消費と農業継続の社会的ニーズを増やそうという試みだ。国分寺市では、市内の農畜産物やそれらを使った飲食店のメニューの PR によって市内消費の促進と国分寺市の活性化を目指す「こくベジ」プロジェクトが行われている。緩いブランド化の使用条件、飲食店や農家とのコミュニケーションを担うこくベジ便という流通経路、多様な PR イベントによって、市内の多様な関係者が参加できる仕組みであり、地域の事業者や市民の理解と共感を得ることで、農業継続の推進に資するものとなっている（甲田ら 2021）。

## 第2項 都市農家と農業継続

本論文では、上述した都市農業の現実について、別の観点から捉えてみたい。着目するのは次の2点である。まず、都市農地を所有するのは農家であり、その所有者の意向に農地の存続は委ねられてきたこと。すなわち、農業継続を目指すさまざまな動きの最上流には農家の意思決定が前提とされていることだ。従って、良好な都市環境に寄与する都市農業の継続を考えると、農家の現状を踏まえて、何が継続の動機になるのかを捉える必要がある。もう1つは、2015年に施行された都市農業振興基本法で示されたように、農家が継続してきたのは、「生産品を出す」という経済活動としての農業だけではないということだ。地域の歴史や文化、品種、栽培技術などといった農家でしか残らないものもある。例えば、在来種・伝統野菜は効率化の時代にそぐわないものの、遺伝的多様性を維持し、食や地域の文化を後世に伝える機能を有しており、それらは農家によって受け継がれてきた（香坂ら 2015）。

都市農家の状況を見ると、多くの都市農家は、不動産収入などの農外収入で家計を安定化させながら、農地を維持し、農家としてあり続けてきた。重い相続税によって相続時に農地を売らざるを得ない状況があり、それによってさらに農業収入で家計を成り立たせることが困難になるという負のスパイラルに陥っている状況がそこにはある。そのような状況の中で、なぜ都市農家は農の営みをやめないのか。

本論文ではここに一つの仮説を立てたい。すなわち、生活するためのものとして農業があるのではなく、地域文化やそれらの詰まった品種、栽培方法、ひいては農の営みが支える個人のアイデンティティや先祖への畏敬が継続の動機となっているのではないか、という仮説だ。都市農業はマイナーサブシステム化しながら、それゆえに継続されてきたのではないか。

松井（1998）によるとマイナーサブシステムとは、経済的な意味が小さく、労働としても厳しい活動であるにもかかわらず、当事者たちの意外なほどの情熱によって継承されてきたものとされる。ここで想定されるのは、主要生業<sup>2</sup>としての農業に対して、狩猟や漁撈、採取といった活動であり、当事者にとって生活の中心にあるものと経済性の高いものは一

---

<sup>2</sup> ここでの主要生業と副次的生業は、客観的な経済性の大小のみを意味するものとする。

致する。

現在の都市農業を見てみると、主収入源として不動産を所有しながら農業を続けている。これは客観的に経済性を軸として見ると、農業から不動産、副次的生業から農業というシフトが起きている。重い相続税や管理義務、大きな不動産収入といった都市農業が置かれる状況を考えると、副次的な経済効果という意味合いのみで継続は説明できず、マイナーサブシステム化していると言えるだろう。もともとのマイナーサブシステムの概念では、収入を得る主要生業として農業は設定されてきたため、ねじれが発生している。しかし、農の営みとしての農業が、主要な生計においてマイナー化すること、すなわち生きがいや地域文化の維持をもたらすマイナーサブシステム化が、現代の都市農業を支えてきたというねじれの構図があるのではないか。本論では、この仮説を踏まえて、農家がいかにして農家であり続けてきたのか、そして継続することを支える仕組みとはどのようなものがありうるのかについて考えることを目的とする。

### 第3項 継承されるものは何か

都市農家の存続に関する研究は、都市農業という文脈において、農家と市民とがいかにして共同できるかという点に主眼が置かれてきた（水上 2019）。飯塚（2019）の東京都小平市を事例とした研究では、都市の地域的条件を活用し、農産物直売所、観光農園、学校給食出荷といった形で農業経営に反映して、都市住民との多様な交流関係を築くことで、維持存続させているとした。また、唐崎（2016）は、都市住民が地元の農業者を買い支え、農作業への支援を行うことで農家を支える CSA（Community Supported Agriculture）について取り上げ、農家の経営安定化だけでなく、市民参加の進展や新規就農者の育成など都市農地の多様な機能を発揮しうるモデルであるとした。しかしこれらの研究は、市民との共同による農業の継続可能性は見出せたものの、結局は経営面という部分に終始している。農家の家計全体に占める農業経営の比率が低い現状では、これらの研究では農家の継続を十分に説明することはできない。従って、農家の日々の作業に注目し、どんなものやことが影響を与えているのかをより細かく見ていくことが重要であると考ええる。

ここで大きな示唆をくれるのが米村（1999）の「家」の存続についての議論である。米村は明治、大正期の家訓及び家憲をもとに「家」がどのように存続されてきたかについて分析した。「家」は経営と系譜の二重の意味を持っていたが、「家」であるかどうかを確かめる際に重要視されたものが家財や暖簾、血縁などの継承財であり、その有無が血縁を超えた人々をも包摂する「家」として連帯できるかどうかに関わっていたとした。さらに、社会的信用の単位としての「家」の意味や法的根拠が減退する中で、時代に合わせて適合する継承財を持つことが「家」の存立の条件となっていたとした。都市農家も単位としては「家」であり、そこで所有されるものが継承財として農業を続けていく理由につながっていることは十分に考えられる。筆頭に挙がるものとして土地があるが、農地が減少し続ける現状を見ると、農地は農業を継続するための継承財とはならず、不動産や宅地へと転用するための

財としてしか存在していないことがわかる。従って、都市農家は農地以外の、何らかの継承財を所有している可能性がある。

本論で扱う東京うどは、長い歴史を持ちながら栽培が変遷してきた都市的な作物である。換金性が高い、いわゆる儲かる農業として産地が拡大したが、需要の低下や価格の下落からその優位性を失い、産地は縮小していった。今では幻になりかねない野菜であると言えるだろう。それでも立川市を筆頭に特産物として細々ながら生産は続いており、各農家によって品質の高い真っ白なウドが作られる。さらに、市内では小学校の授業で取り扱われ、農家からは「立川って言ったらウドしかないみたいな感じ」（2020/08/27 立川市農家 Sn インタビュー）<sup>3</sup>という声も聞かれるなど、農産物としてその地位が確立されていると言える。その中で農家はどのようにして東京うど農家であり続けることができたのだろうか。

東京うどを中心に据えて、それを取り巻く様々な関係者を見ていくことで、農家を取り巻く経済的状況、社会的状況を明らかにし、かつ農業を営む農家の日々の作業やライフヒストリーを並列して分析し、東京うど栽培を続けている農家の実情を描き出す。そして、都市農業がマイナーサブシステム化することで農業が継続し、農地が残ると仮定し、その要因を明らかにする。

## 第2節 研究の手法

本研究では、立川市内の東京うど農家を中心に調査を行なった。具体的には、参与観察及びインタビュー調査を行った。参与観察は、立川市の東京うど農家一件で、2020年11月から立川市の援農ボランティア制度を利用し、年間通して農作業を行った。インタビュー調査は、援農先のウド農家に行うとともに、そのウド農家から地域のウド農家を紹介してもらう形で、協力者を得た。また市内のウド関係者や市街のウド農家へのインタビューはSNS等を用いて連絡し、協力を得た。さらにメールでのインタビューも併用した。訪問に際しては、新型コロナウイルスの蔓延状況に注視しつつ、訪問可否の確認を綿密に行った。

本論をまとめる上では、援農先農家での参与観察とインタビューから得られた内容を中心に据え、その他の農家や関係者のインタビューを参照していく形をとった。以下に、参与観察の記録と、インタビュー調査の記録を表で示す。

---

<sup>3</sup> 祖父母はウド農家であったが、今は栽培していない。

表 1 参与観察記録

日付	作業内容	協力者
2020/11/19	根株移動、仕分け、仮植え	東京うど農家 Y
2020/11/23	伏せ込み	〃
2020/12/03	生育状況調査、刈り取り	〃
2020/12/17	枯れたウドの運搬	〃
2020/12/24	収穫、出荷	〃
2021/01/10	仮植えウド掘り起こし、薬剤処理	〃
2021/02/19	品評会	JA、東京うど農家 Y
2021/02/20	ウド掘り取り	東京うど農家
2021/04/07	ウド根株薬剤処理	〃
2021/04/22	高冷地株上げ、定植（群馬県）	〃
2021/06/02	根株植え	〃
2021/06/27	ウドラ出演イベント	ウドラ作者 M、(株) 壽屋 S
2021/11/13	泥入れ、株の仕分け	東京うど農家 Y
2021/11/14	株仮埋め	〃
2021/12/1-3	刈り取り、わら縛り	三島独活農家 N
2021/12/25	収穫	東京うど農家 Y

表 2 インタビュー調査記録

日付	協力者	場所
2020/08/27	農家 Sn（非ウド）	立川市
2021/03/13	東京うど農家 Y	立川市
2021/05/07	三島独活農家 N	オンライン
2021/06/29	ウドラ作者 M、(株) 壽屋 S	立川市
2021/07/17	東京うど農家 K	立川市
2021/08/21	東京うど農家 Y（2回目）	立川市
2021/08/22	東京うど農家 N	立川市
2021/08/24	東京うど農家 S	立川市
2021/09/05	東京うど農家 M	立川市
2021/10/02	立川市役所	立川市
2021/10/09	東京うど農家 O	立川市
2021/12/02	三島独活農家 N	大阪府

### 第3節 本論の構成

本論は全9章から構成される。本章を受けて、第2章では、まずウドについて概要と栽培化の歴史に簡単に触れた後、江戸時代から1990年代の導入から発展、減少に転じるまでの歴史を5つに時代区分し、品種、産地、栽培方法・技術、品種という切り口から概観し、考察する。

東京都全体における東京うどの歴史をまとめた第2章を受けて、第3章では本研究で調査を行なった立川市について概要を述べ、さらに立川市の農業、東京うどについて簡単にまとめる。

第4章は、東京うど農家Yを中心にウド農家がいかにしてウド栽培を継ぎ、ウド農家として人生を送ってきたのか記述し、東京うどとの関係を考察する。

第5章では、東京うどを作っている現場に焦点を当てる。Yのウド栽培を1シーズン通して参与観察した内容をもとに、ウド栽培を3つの時期に分け、栽培時の動作や要点を細かく記述し、日々の作業について考察する。

第6章では、東京うど農家が置かれている都市農業について、都市政策、農業政策についてこれまでの背景をまとめ、それを踏まえて東京うど農家のインタビューをもとに、ウド農家として、また一農家として続けていくことの困難や制度とのギャップを示し、考察する。

第7章ではインタビューをもとに、生産や産地ではない形で立川市内に東京うどが広がり、それぞれの市内関係者が東京うどとさまざまな方法で関わる様子を捉える。

第8章は、東京うど農家が将来へウドを繋いでいくことをどのように考えているか外観した後、新しい形として引き継がれた三島独活の事例について分析する。

最後に第9章において、各章についてまとめる。そして、マイナーサブシステムにならざるを得ない状況が東京うど継続に寄与し、農業の継続にもつながるという視点から、東京うどが続けられてきた要因を示す。さらに、東京うどの栽培が続き、継承されることが、都市農業・農地が存続していく一つのエンジンになりうることを示すとともに、農家により注目することの重要性を主張する。

## 第2章 東京うどという品種

本章では、第1節において東京うどが属するウドという作物について概要を述べ、また人によって山野草から野菜として利用された経緯を説明する。そして、第2節以降では文献をもとに、東京都に導入され、発展、衰退していくまでの経緯を、品種、産地、栽培方法・技術、出荷という点に注目して辿る。『東京うど物語』（東京うど生産組合連合会 1997）の歴史に関する記述を再編しながら、他の東京うどに関する文献を参照し、まとめた。これらの歴史を概観することによって、農家、東京うど、そして栽培技術がどのように関係してきたのか明らかにする。

### 第1節 ウド

植物種としてのウド (*Aralia cordata*) はウコギ科に分類される多年草で、東アジアに広く野生分布するが、野菜として利用しているのは日本のみである。日本原産の野菜はとてもなく20種類ほどとされているが、その一つとして古くから薬草や山菜として食されてきた。ウドは大きく山ウドと軟化ウドに分類することができ、山ウドが野生種または光に当てて栽培出荷されるのに対して、軟化ウドは光に当てず栽培される。卸売市場においても、山ウドは山菜類に分類されるのに対して、軟化ウド（取扱名はウド）は葉茎菜類に分類され、同じ植物であるが野菜としての扱いは異なる。特に東京都で作られる軟化ウドを東京うど<sup>4</sup>といい、関東ローム層の固い地層に掘られたウドムロと呼ばれる地下の穴蔵で栽培されることが特徴である。また、その真っ白な姿やみずみずしくクセのない味など品質が高く評価されている。



図1 東京うどの全長および部位の名称（筆者撮影・作成）<sup>5</sup>

ウドの栽培化の詳細は判然としないが、大化の改新以降の中古期（655年～1220年）の

<sup>4</sup> ブランド名としての「東京うど」は、通常ひらがなを用いるためそれに倣う。一方で栽培時の植物としての「ウド」ならびに「ウド」一般を示す場合には学術表記に則ってカタカナで表記する。

<sup>5</sup> 以下掲載する写真は、特別記載がない場合、筆者が撮影したものとする。

京都付近で始まったと推定されている。当時は霜が降り植物の枯れる晩秋から翌春の間の野菜は非常に貴重であり、ウドは春を待つ人たちにとって待望の山菜であった。はじめは毎回同じ場所に生える野生ウドに土や落ち葉を盛り上げ、柔らかい部分を多くして採取していたと考えられる。そしてその後、根株ごと採取し家の近くに植え、落ち葉で覆って最初に伸びる葉の軟化茎を収穫するようになり、栽培化が進展して行ったとされる。『延喜式』<sup>6</sup>(927)には、元日御薬と呼ばれる元日に宮中に供される薬として名を連ねており、元は薬用として使われていたことが推測される。

関東地方への栽培導入は江戸に幕府が開かれた1603年以降とされるが、不明な点が多い。東京都へのウド栽培が導入された年代についても明確ではないが、江戸幕府が開かれた1603年以降とされ、自生していたウドを春先に採取して利用したのがはじまりとされる。

## 第2節 東京への栽培導入期(1800年代初期～1900年代初期)

### 第1項 導入

都内におけるウドの記録としては、東京府農会報第八十八号(1924)の中で、文化年間(1803~1817)頃から栽培されているとされるが、1824年に井荻村(現杉並区)大字上井草の古谷岩右衛門が尾張付近から栽培方法を学び周辺に伝えたことは確かなことであるとされる。東京府農事試験場中西健一技師の園芸現地復命書(1924)においても、天保年間(1830~1843)から豊多摩郡高井戸村大宮前の一部においてウド栽培が行われていることが記されている。さらに武蔵野市史続資料篇八にある井口家文書五からも1858年時点で武蔵野市関前においてウドが相当量作られていたことがわかっている。これらの文献に加えて、東京府史行政編第二卷(1935)において、当時栽培が最も多かった北多摩郡の武蔵野町吉祥寺がウドの本場として有名であり、高井戸や井荻等の各町は吉祥寺に接近していることから技術を学びウド栽培が拡大したという記述がなされている。これらのことから、ウドが東京に導入された地域は大泉、石神井、上井草、吉祥寺、松庵、大宮前、高井戸の一帯であると考えられている。またその導入経路については、以前より栽培されていた京都、大阪、伊勢などの関西や尾張からとの説があるが明確ではない。また江戸近くのウド作地からの導入や自生する山ウドを栽培化したとも考えられている。ウドは薬として利用されてきたが、『本朝食鑑』<sup>7</sup>(1692)では食用可能な時期について言及されており、江戸時代前期には日常的に食べられていたものと考えられる。

栽培が拡大した要因についても明確ではないが、江戸からの文化的背景が大きく影響していると考えられる。ウドの栽培化が導入された江戸の中後期は娯楽的な食への関心が高まった時期である。当時、食に対する「通」の意識が急速に拡大したが、本来の旬よりも早い時期に売られる初物志向はその成れの果ての姿であった。常軌を逸した取引により禁止

---

<sup>6</sup> 醍醐天皇の命により編纂された平安時代の法令集。

<sup>7</sup> 江戸時代に人見必大によって著された食料本草書。薬物学としての本草のたてまえを持ちつつ、日用食品を中心に解説しようと試みた。



令が出たほどであった。このようなふるまいの流行は、その後次第に収束し、「通」は様々な領域に通じた人を示す一般的な言葉となった。一方で、「通」概念に内在した美意識は「いき」概念に吸収されることとなる（橋本 2017）。九鬼（2006）によると「いき」な味とは、味覚だけではなく嗅覚や触覚をも共に働かせる刺激の強い、複雑なものであるとともに淡泊なものとしている。さらに淡泊であるからこそその産地でも良いのではなく、産地間の差異までも重要な要素であることを暗示している（橋本 2017）。これらのことから、東京でのウドは初物志向が高まる社会状況の中、とりわけ春を待つ人々の待望の野菜でもあったことから重宝され、重要な換金作物として周辺に産地が形成されたと考えられる。また、派手な初物志向の流行が過ぎ去った後も「いき」を内在する野菜として料亭などで扱われ、その高級食材としての地位を確立していったと推察される。

## 第2項 品種・栽培方法

都内においてウド産地が拡大する中で、最初に品種として確認されているのが「所沢ウド」である。当時の農家は所沢の市でウド苗を買い、都内まで天秤棒で担いで持って帰ってきたという。所沢での苗栽培は実生繁殖で行われ、4月に播種をし、約1年後の3月に掘り取られ販売された。都内での栽培は、4月中に定植され1～2年間畑で栽培が行われた。掘り取りは9月に行われ、その後根株は20～30日乾燥させてから一昼夜水に浸された。この作業は、萌芽を早め、かつ芽の出方を揃えるために行われていた。そして土ムロと呼ばれる土を盛って日光を遮断する方法で伏せ込み、30日以内で収穫が行われた。品質に関しては、以後導入される品種より劣っていた上に収量も少なかったと言われており、葉柄（腕）ばかり伸びるため乞食ウドとも呼ばれた。

## 第3項 産地

「所沢ウド」は、1887年（明治20年）に練馬、1916～1917年（大正5～6年）に小金井、1921年（大正10年）に国分寺へと伝えられ、豊多摩地域のみならず北多摩地域においても栽培が行われた。結果として所沢ウドの産地は吉祥寺、保谷、松庵、井荻、大宮前、高井戸、石神井、大泉、小金井、国分寺であったとされる。当時のウド栽培の伝播は、基本的に農家同士一対一の中で行われており、従ってスポット的に栽培農家が増えていったのがこの時期の特徴であると言える。

吉祥寺が一大産地であったため栽培されるウドは「吉祥寺ウド」として有名になった。また井荻でも「井荻ウド」が特産物となった。これには単に生産量が多いだけではなく、1877年（明治10年）のウド争議をはじめとする農家と問屋の交渉が影響していると考えられている。当時ウドの出荷を行っていた神田多町の独活問屋紀伊國屋の度重なる仲介手数料の値上げに抗議し、要求を受け入れない場合は一切の出荷をボイコットすることを取り決めた。生産組合などは存在しなかったが、吉祥寺のほとんどのウド農家（100戸以上）が共同してこのウド争議に加わり、交渉を行なった。このような交渉の繰り返しにより「吉祥寺ウ

ド」として市場で独占的な地位を確立していったとされる。

### 第3節 産地拡大期Ⅰ（1800年代後半～1925年頃）

#### 第1項 品種

新しい良品種が数多く導入され、北多摩地域にさらに栽培農家が増えた時期である。最初に普及したのが「寒ウド」と呼ばれる北海道を原産とする良品種である。北海道から埼玉県安行村（現埼玉県川口市）と下総（現千葉県北部及び茨城県南部）を經由し移入された。これは吉祥寺周辺が古くから安行や下総との交通路を持っていたことが大きな要因と考えられている。それぞれの地域から移入された「寒ウド」は種類が異なり、安行村からは1890年（明治23年）に「赤芽種」、下総からは1881年（明治14年）に「白芽種」が導入された。また加えて「白芽種」の中から選抜されたとされる「ローソク」が大正から昭和にかけて栽培された。

「赤芽種」は極早生品種で芽にはほとんど休眠がなく10℃前後の低温で萌芽するのが特徴である。軟化茎は細く淡紅色で、葉柄が長い。また毛茸<sup>8</sup>はやや多い。香りがよく、柔らかいため品質は良いとされる。一株あたりの芽数は多いものの、生育が悪く収量は少ない。また収穫後の株（芽取り株）で繁殖が行える品種であった。12月20日頃から2月末まで出荷された。

「白芽種」は早生品種で、軟化茎はやや赤みを帯びた白色であり、太さは「赤芽種」よりやや細い。香りが強く、品質は良いとされる。また収量はやや落ちるとされる。

「ローソク」は早晩生品種で「寒ウド」の中では最高品質のものとして市場において多少高値で取引された。軟化茎は白く透明感があり、先の方が濃い紫色をしていることから「紫」とも呼ばれた。葉柄は長く、茎も太いが、芽数が少なく一株からほぼ一本しか出ないことから収量は少なかった。またこれら「寒ウド」は共通して連作を嫌う傾向にあり、1年間ウドを栽培すると2～3年間は畑を空ける必要があった。

さらにこれと同時期に「極早生」と呼ばれる白芽系品種も普及した。原産地はわかっていないが、1887年（明治20年）頃安行から吉祥寺に「寒ウド」と一緒に導入されたのではないかとされている。中晩生品種で、軟化茎は中太、葉柄は出やすくやや苦味があるが柔らかく、品質は中程度とされる。また芽数が少ないため収量も中程度とされる（収量が多いが品質が悪く、苦味が多いという記述もある）。2月末以降に出荷された。

#### 第2項 産地

3種類の「寒ウド」の導入後、吉祥寺は産地として発展を遂げ、1907年（明治40年）頃には最盛期を迎えた。従って「寒ウド」の中心地は吉祥寺であったと言えるが、他の地域にも生産は広がった。当時、同じ面積の杉（20年生）とウドの一作の儲けが同じだったとい

---

<sup>8</sup> 表面に生えている産毛。

う話もあり、非常に換金性が高かったと言える。「赤芽種」は吉祥寺から 1896 年（明治 29 年）に武蔵境、1904 年（明治 37 年）に練馬、1916 年（大正 5 年）に武蔵野<sup>9</sup>から小平、三鷹、1921 年（大正 10 年）に保谷から国分寺にそれぞれ広がった。「白芽種」は、1887 年には田無、保谷ですでに栽培がされており、1926 年（大正 15 年）に吉祥寺から国分寺に伝わった。また「ローソク」は 1921 年（大正 10 年）に吉祥寺で栽培が確認されており、1930 年（昭和 5 年）に武蔵境から三鷹へ伝わった。その後 1943 年（昭和 18 年）頃を最盛期として、1960 年（昭和 35 年）頃まで長きに渡って栽培された。

「極早生」は吉祥寺に導入された 1887 年（明治 20 年）頃に田無でも伝えられたとされ、また 1914 年（大正 3 年）に吉祥寺から練馬に、1916 年（大正 5 年）に武蔵野から小平に、1918 年（大正 7 年）に吉祥寺から立川と三鷹、1924 年（大正 13 年）に保谷から小金井に導入されたとされる。その後 1952 年（昭和 27 年）頃まで栽培が行われた。

### 第 3 項 栽培方法・技術

当時のウド作付面積は、伏せ込みに落葉が必要であったため、各家が持っている雑木林の面積に左右された。ウド 10a あたり 13a の雑木林が必要であったという。1902 年頃（明治末期）の「寒ウド」の栽培法は、白芽種は 3 月下旬に定植された根株を 12 月中下旬掘り取り、その後 4~5 日間乾燥させてから軟化が行われた。

この時期の軟化方法は溝式軟化法と呼ばれる方法で、畑に溝を掘りその中で行なった。幅約 55cm、深さ 45cm（長さはウドの数に応じて適宜）の穴（以下、軟化孔）を掘り、底に落葉を入れて、上から硬くなるように押し込んで約 18cm~21cm の厚さにした。その上に約 3cm の厚さになるように湿る程度の薄めた人糞尿、少々のお稈、畑土を入れた。そこにウドの根株を密に詰め込み、3cm ほど畑土で覆って上から少しの人糞尿を与えた。さらにその上に、畑土を厚さ約 15~18cm、お稈、菰<sup>10</sup>で覆って、最後に残った土を盛った。2 週間ほど経過したところで、時々手を軟化孔の中に入れて温度を確認した。30℃前後を基準として温度が高すぎる場合は菰とお稈を取り除き、棒を挿して穴を開ける、水を注ぐなどした。低すぎる場合は「やけ」<sup>11</sup>と呼ばれる軟化床のすぐ横に穴を掘って、その中で落葉等を燃す方法で熱を加えた。天候に加え、土質<sup>12</sup>によっても熱の変化は異なり、加減が難しい作業であった。発芽を確認したら菰を取り除き、お稈を厚く盛り、約 45 日で収穫できた。「赤芽種」も栽培方法はほぼ同じであったが、伏せ込みに 3 年産の古株を用いること、掘り取りを 11 月

<sup>9</sup> 武蔵野は吉祥寺、武蔵境を含めた産地一帯を示している。

<sup>10</sup> マコモ（イネ科植物）を粗く編んで作った敷物。現在、多くは藁を用いる。

<sup>11</sup> 1886 年（明治 29 年）頃に始まった方法である。軟化床から約 15cm 離して平行に鍬の幅の穴を掘る。下に行くに従って軟化床に近づくように斜めに掘り進め、底は 9cm ほどの距離になるようにする。穴には小麦稈を入れて火を点け、その上に落葉、籾殻、蚕糞、塵埃を重ねる。そしてその上を菰、土で多い、棒で穴を開けて排気できるようにする。この作業を夕方から夜間に行なった。

<sup>12</sup> アラクと呼ばれる雑木林などを開墾した土地で養成したウドは出来がよく、根が柔らかかったため伏せ込んだ後、熱を保持しやすかった。

上旬に行うこと、温度を「白芽種」の約半分（約 15℃）にすることが異なる点であった。

1924 年頃（大正末期）の栽培は、高値がつく正月出荷に向けて 11 月中旬頃から軟化栽培が行われていた。東西方向に幅約 52cm、深さ約 60cm の軟化孔を掘り、底から、甘藷蔓、落葉、陸稲稈を積み重ねて硬く踏み込み、約 36~39cm の厚さにした。そこに人糞尿を散布し再び踏み込んだ後、細土を 6cm ほど入れた上に根株を伏せ込んだ。約 52cm の幅に 10 株ほど並べて詰め、全て伏せ込んだら土で見えなくなるまで完全に覆った。その上から人尿をかけ、さらに土（地上から 6~9cm の高さになるように）、麦稈（約 30cm）、菰、最後に 6~9cm の土で覆った。軟化孔内の温度が足りない、より成長を促進させたい際には、やけを行なった。伏せ込んでから「白芽種」は約 40 日、「ローソク」は 40~50 日、「極早生」は 55~60 日での収穫となったが、やけを行うと 5 日ほど早く収穫できた。

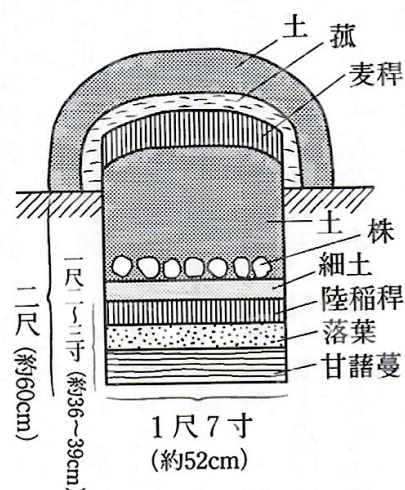


図 2 溝式軟化ムロ  
（『東京うど物語』より）

#### 第 4 項 出荷

軟化ウドの収穫後、出荷に際しては藁を用いて束ねた。ウドには裏表があり、手でこすると赤くなるので表は手を触れずに、裏は節の部分に手を当てその温かさで少しずつ曲がりを直した。そして、寒ウドは二段 25 本、極早生は 20 本を一束にし、二束一口でせりにかけた。一束が 3.75kg 以上あれば上ウドとされた。出荷は神田市場が中心で、各家から大八車に荷を乗せて市場へと運んだ。神田多町にウドの間屋が二件あり、吉祥寺や松庵産のウドが優先的に取引された。

### 第 4 節 産地拡大期Ⅱ（1925 年～1945 年頃）

#### 第 1 項 品種

品質が良く、多収性の春ウド 3 品種が愛知県などから導入された。「愛知坊主」は 1925 年前後（大正末～昭和初期）に武蔵境、「伊勢白」は時期は不明であるが吉祥寺、「愛知紫」は 1926 年頃（昭和初期）に武蔵境に導入されたと言われている。

「愛知坊主」は晩生品種で草勢は強く、草丈は中程度とされる。軟化茎は太く、白いが赤色の線や節に赤い小斑点が多くできる、葉柄が短い、毛茸が少ない、香気が強い、あくがやや強いという特徴を持つ。品質は中の上程度だが収量は多いとされる。「伊勢白」は中晩生品種で草勢はやや強い。軟化茎は中太で白く、首が黄色、托葉は淡紅色、葉柄がやや伸びやすい、毛茸が少ないといった特徴を持つ。品質は極上とされる。「愛知紫」は晩生品種で、

草勢は強い。軟化茎は太く白色、首が紫色、葉柄はやや長く伸びやすい、毛茸が少ないという特徴を持つ。芽数は少ないが収量は多く、品質も上とされる。

## 第2項 産地

「愛知坊主」は武蔵境に導入後、1927年（昭和2年）に武蔵野から小平、1928年（昭和3年）に愛知から保谷、1930年頃（昭和5年）にも愛知から吉祥寺に導入された。その後は1932年（昭和7年）から1943年（昭和18年）までの間に練馬、国分寺、三鷹、田無、東村山へと急速に産地が拡大した。

「伊勢白」は1928年（昭和3年）に吉祥寺から保谷に導入され、同年に練馬でも市場から購入した軟化ウドを増殖したとされる。少し空いて1937~1938年（昭和12~13年）に愛知から三鷹、1940年（昭和15年）に吉祥寺から田無、1943年（昭和18年）に愛知から国分寺及び小平に導入された。品質は高かったものの、産地の拡大は鈍かった。

「愛知紫」は1925~1935年頃（昭和初期）に愛知から武蔵境に導入されたと言われている。また1940年（昭和15年）には同じく愛知から国分寺、同年に吉祥寺周辺から田無、1942年（昭和17年）に保谷から練馬へと導入された。「愛知坊主」や「伊勢白」に比べやや遅く導入されたため、戦争の激化の影響からあまり普及しなかった。この時期までの根株の流通は農家同士で行われており、加えて親戚関係や信頼できる間柄でしかやりとりされてこなかった。これは「嫁はやってもウドの根株は腐らせてもやるな」というウド農家の間で伝わる言葉<sup>13</sup>にも表れている。換金性の高い貴重なものであったとともに、そうであっても急速に拡大することなく産地としての地位を確保してきたのはこう言った理由からであると考えられる。

## 第3項 栽培方法・技術

現在主流となっている穴蔵軟化栽培<sup>14</sup>がより広い地域に普及したのは戦後であるが、その開発は戦前とされている。穴蔵がいつから利用されはじめたのかは不明であるが、関東ローム層の硬く深い土層は恒温層であるため温度の変化が年間通して小さく、それを利用して武蔵野台地上の地域では冬季の貯蔵庫として広く普及していたとされる。最も古いものは1927年（昭和2年）に小金井市の高杉景明によるもので、屋敷の中にあった二、三代前に掘られた甘藷の貯蔵穴を利用して軟化が行われた。高杉は、はじめネギの貯蔵に使ったが、少し長く入れておくと腐ってしまった。このことから暖かさが持続する穴を何かに利用できないかと考えた末、ウドの軟化を始めることとなった。土の気がなく、真っ直ぐなことから市場からの評価もよく、ウドには穴蔵軟化が最適であると考えたようだ。その一方で当時の品種や技術では一年に一回しか軟化できず、またそれまでの方法よりも単収が多く軟化

<sup>13</sup> 2021年8月24日 東京うど農家Sインタビューより。

<sup>14</sup> 横穴軟化とも呼ばれるが、本論ではムロ全体を表す際「穴蔵軟化」を採用する。なお、横穴は、地下に降りた際の十字方向に伸びる穴それぞれのことを示すものとする。

した後の根株を翌年の種株として利用できなかったことから、全面転換には至らなかった。

その後、練馬の野田良助が1942年（昭和17年）、武蔵境の高橋米太郎が1943年（昭和18年）にそれぞれ戦中の混乱期に細々と栽培を続けた。高橋は、戦争の激化に伴い食糧増産のためにウドどころではなくなっていたが、戦争に勝利したときには祝賀会が続きウドが高く売れるに違いないと考え、種株を残すようにしていた。人目のつかない、屋敷内にあった桑の葉を貯蔵した穴蔵を使って軟化してみたところよくでき、その後も試行錯誤を続け、戦後まもなく軟化法を完成させたとされる。この穴蔵軟化法によって、2月下旬に出荷できれば優秀とされていた「愛知坊主」を、1ヶ月以上早い1月中旬に出荷することができるようになった。このようにして、穴蔵での軟化は偶発的に行われはじめ、最初の年に偶然にも出来が良かったという幸運もあり、方法が確立された。

#### 第4項 出荷

1935年（昭和10年）頃になると、束での出荷から木箱出荷へと変わった。藁でウドを束ねる作業は手間がかかり、人手も必要であったため、より良い方法はないかということで考案された。はじめ小平や練馬、保谷ではりんご箱を半分に切った2貫目（7.5kg）入りの木箱を使用し、また小金井、国分寺、武蔵境では3貫目（約11kg）入りのウド専用木箱を作り使用した。その後、武蔵野で1貫目（3.75kg）入りの木箱が作られ、次第使われるようになった。

### 第5節 戦後最盛期（1945~1970年頃）

#### 第1項 品種

戦前から続く品種に加え、その改良種および系統種が急速に広がった。まず戦前からある品種として「愛知坊主」、「伊勢白」は戦後も産地が広がった。「愛知紫」は戦前からの系統に加え、「紫芽白」と呼ばれる優良系統が新しく愛知から導入され産地が広がった。首の紫色が薄いことが特徴であり、その後「紫」（以下、「紫芽白」は「紫」と記載する）と呼ばれているものと考えられる。

「改良伊勢」は1957年（昭和32年）頃に保谷で「愛知紫」から選抜された品種と言われており、「伊勢白」に似た特徴を持つが、葉柄の伸びが少ないとされる。

#### 第2項 産地

戦後すぐは食糧難だったため、ウドは贅沢品とされ作付統制で作ることができなかった。そこで辞めてしまった農家もあり、当時の根株は一部の農家が非常に苦労して確保したものでとても貴重であった。その後再び出荷されるようになると、その希少性から高価で取引され、一度途絶えた産地でも再導入されるなど生産が拡大していった。

「伊勢白」は1951年（昭和26年）に武蔵境から立川、同年「愛知坊主」も立川に導入された。

「紫」は、1951 年（昭和 26 年）に愛知から保谷、1955 年（昭和 30 年）頃に武蔵境から立川、1956 年（昭和 31 年）に小平、1958 年（昭和 33 年）頃に東村山、1959 年（昭和 34 年）に武蔵境から三鷹に導入された。「紫」はこれまでの農家間の根株の流通に加え、行政が産地拡大に大きく貢献したと考えられる。1948 年（昭和 23 年）に農業改良助長法<sup>15</sup>が施行され、北多摩第三地区農業改良相談所（久留米、保谷、小平、清瀬、田無が担当地域）が新設された。そこに赴任してきて大きな役割を果たしたのが石川実技師であったとされる。石川実技師は田無農業改良普及協議会として愛知県から「紫」を種株の導入を行った。導入を数年間継続しながら、その間保谷のウド農家を中心となって栽培、増殖および系統選抜を行い、担当市町村へと割り当て、市の職員なども関わりながら生産者に配布した。

「改良伊勢」は、時期は不明であるが保谷から小平、1961 年（昭和 36 年）に小平から練馬に渡った。

### 第 3 項 栽培方法

産地が拡大する中で、都内各地で様々な試行錯誤がなされ、主に軟化法、根株養成、生産時期に著しい変化があった。

軟化法は 1950 年時点で行われていたのは、溝式、穴蔵式、堅ムロ式<sup>16</sup>の三軟化法であった。溝式軟化法が主流であったが、生産や品質に問題を抱えており、残り二つの軟化法も使われはじめた。特に穴蔵式軟化法はその後先進農家が指導を行ったり、農業改良普及員が講習会を行ったりすることで急速に普及した。もともと貯蔵庫として利用されていたこともあり、住居の近くに掘られていることが多かった。

穴蔵の構造としては、出入り口が一辺 90cm 程度の四角形（まれに円形）、地下 3~5m 掘り進め、そこから横穴が多くの場合 3~4 方向に掘られていた。出入り口にはレンガなどで枠が作られ雨水の侵入を防ぎ、上には板、箆で覆うのが通常であった。地下の横穴の出入り口は温度の変化を最小限にするため幅 60~90cm、高さ 90cm 前後と狭く、屈んで出入りする大きさだった。出入り口から奥は再び広くなっており、幅 1.2~2m、高さ 1.2m 程度、奥行き 3m 程度だったが、場所によって大きさは異なった。天井は丸みを帯びさせることで強度を高め、また床面も水やガスがたまるのを防ぐため入り口から奥に向かってやや高めにする、外気の影響軽減のため横穴の入り口に箆を吊るすなど工夫が施されていた（図 3）。穴蔵は基本的に農家が自力で掘るものであり、スコップやジョレン、唐鍬などで掘り、滑車を利用して土を搬出していた。穴蔵軟化法は、穴蔵が半永久的に利用でき土地利用上も他の作物と競合しないことに加え、栽培上も年間通して温度、湿度の変動が少ないことが大きな

---

<sup>15</sup> 1948 年（昭和 23 年）に GHQ の指導のもと施行。これにより共同農業普及事業が発足し、農業技術の助言指導、農家生活の合理化を目指す農家生活改善事業、農家子弟の自主的校外教育・訓練としての農村青少年グループ活動の指導が行われた（加賀山 1981）。

<sup>16</sup> 1950 年当時の文献においては、穴蔵式と堅ムロ式の区別はなく堅窖式の名称で統一されているが、本稿では別のものとして記述する。

長所であった。一方で二酸化炭素と作業性の悪さが短所であった。植物の呼吸や加温のための火燃しで発生する二酸化炭素による事故で犠牲者が出ることがあり、換気口の設置や地下へ降りる際にマッチやろうソクで酸素の有無を確認するといったことも安全対策として行われてきた。また狭い穴蔵での作業は体への負担が大きく、地上を行き来するのも一人では効率が悪いので 2~3 人での協力を必要とした。それでも他の軟化法に比べて優れた長所を有していたため現在でも続けられ、東京うどん生産に大きな役割を果たしてきたとされる。

またもう一つ行われていたのが竪ムロ式軟化法であった。1949 年（昭和 24 年）に農業改良普及員の勧めで保谷にて試作されたと言われている。トックリ穴とも言われ徳利のように出入り口が小さく中は広いという特徴を持ち、原型はミツバの軟化ムロからきたものと考えられている。竪むろの構造は、出入り口は一辺 90cm の四角形、深さは 2.3~3m で、底の中央部に出入りの際の梯子受けや加温時の熱源置き場として一辺 60cm、高さ 30cm ほどの台がある。底面は半径 3m ほどの円形で、天井は出入り口から 70cm~1m ほど掘ったところと底面の端から 1m の高さとを結んだ斜面になっている（図 4）。竪ムロ式の長所は一人で立った姿勢で作業ができ、さらに生育中の観察、温度管理、灌水、病虫害防除などの管理も容易であるところである。また穴蔵式同様に半永久的に使い続けられ、夏は外気温の影響を受けやすいものの、冬季は火燃しを行えば軟化に十分な保温機能を有していた。一方で出入り口や底面を大きくした際に落盤する危険性が高く、十分な配慮が必要であった。収量を増やしたくても、大きなムロは作れなかったものと考えられる。

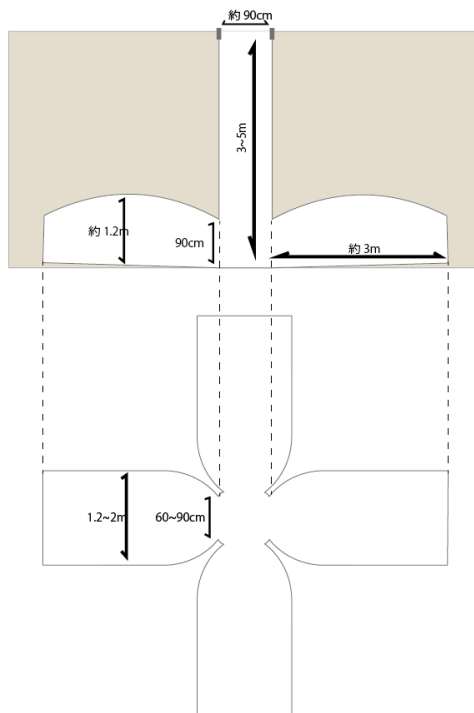


図3 穴蔵式軟化  
（『東京うどん物語』を参考に筆者作成）

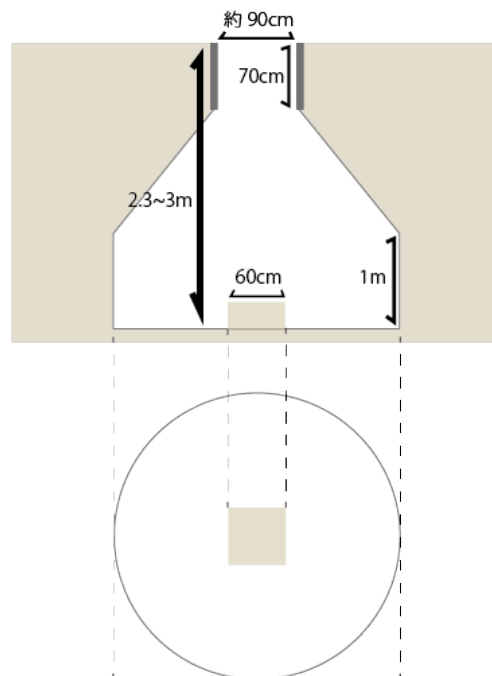


図4 竪ムロ式軟化  
（『東京うどん物語』を参考に筆者作成）



次に、根株養成はこれまで東京都の圃場で行われていたが、1950年代以降は高冷地での委託栽培も始まった。武蔵境の高橋遼吉は、ウドは霜が降りてから1ヶ月ほどしないと休眠が明けない<sup>17</sup>ことから、より寒い地域や高冷地で栽培を行えば出荷を早めることができるのではないかと考え、1951年（昭和26年）に群馬県北軽井沢に作付けを依頼した。また、翌年には嬬恋村の方が良いのではないかという助言から、親戚の高橋米太郎とともに嬬恋村農協と契約を結び、高冷地委託栽培をはじめた。その後1953年（昭和28年）頃には田無地区の農業改良普及員によって事業化が計画され、標高900m前後で芽取らず株<sup>18</sup>を栽培することが良いという試験結果を得た。そして1955年（昭和30年）から保谷の生産者が団体契約を結び委託をはじめた。その後、その団体契約に1957年（昭和32年）に小平が参加し、翌年には久留米、田無も加わった。また1956年（昭和31年）には調布地区の普及員が中心となって、武蔵野、国分寺、小金井、石神井などが高冷地委託事業を開始した。さらに立川でも1967年（昭和39年）に始まった。農業改良普及員は、栽培に適した高冷地の選定に加え、受託者への栽培に関わるさまざまな指導も行っており、大きな役割を果たしたと言える。

生産時期の変化であるが、これまでの軟化ウドの生産時期は12月から始まり、長くても根株を貯蔵して7月上旬まで出荷されていた。しかし、冷蔵庫などを用いて貯蔵することで6月～11月にも出荷ができる夏ウドと呼ばれる抑制栽培が行われるようになった。1949年（昭和24年）に市場で高値で取引されていた愛知県産の夏ウドを見た保谷のウド農家が、翌年から市場の冷蔵庫で貯蔵してもらい夏ウド栽培を始めた。はじめ軟化したウドの出来はそれほどよくはなかったが、市場で高値がついた。その後、品質や冷蔵庫貯蔵の問題もあったが、保谷の夏ウドは市場で評判になり、他の産地にも普及した。1954年（昭和29年）に練馬、1955年（昭和30年）に小平、1957年（昭和32年）に国分寺、1963年（昭和38年）に立川へと拡大していった。その結果東京都全体の夏ウド生産量は急増し、それまで夏ウドの生産量が一番多かった愛知県を抑えて独占的な地位を確立した。

#### 第4項 栽培技術

1957年（昭和32年）に立川の高橋正直と山本一男は東京都農業試験場（現東京農林総合研究センター）で行われた恒例の農機具展示を見に行った際に、うしろにU字の刃がついた掘り取り専用機が出品されていた。これは八丈島で薬草の根を掘り上げるために使われていたもので、これでウドを掘り取ることはできないか考えた。実際に行ってみたところ、馬力が足らず、機械自体が壊れてしまった。また専用機として購入するには価格が高いた

---

<sup>17</sup> ウドの軟化栽培は、霜が降りると自発休眠し低温要求時間を経たのち、生育に適した温度条件下で休眠が明け発芽すると考えられる。

<sup>18</sup> それまでに軟化栽培したことがない根株。軟化した後の根株は再び植えても生育が悪かった。

め、すでに持っているテラー型耕運機<sup>19</sup>に取り付けて使えないかと考えた。両氏とも情報を集め、自らの耕運機から工夫して試作し、1958 年（昭和 33 年）に完成させた。この初期の堀取機は、U 字の刃の両側に車輪をつけた堀取部分にワイヤーをつないで固定させた耕運機の手軸で引っ張るというものだった。知り合い伝いで製作を依頼されたり、貸したりと計 4 台の堀取機がこの年から翌年にかけて、立川、武蔵野、保谷で使われた。

その後、二人の発明した堀取機は話題を呼んだこともあり、農業改良普及員と経済連<sup>20</sup>によって製品化が計画された。そして、農機具メーカーマメトラ農機（株）と共同で試作改良し、1960 年（昭和 35 年）に販売に至った。販売された堀取機は初期のものとは違い、一端を固定したワイヤーを反対側から回転ドラムで巻きとりながら U 字の刃を取り付けた耕運機が前に進んで掘り取るというものだった。ウド生産上最も過酷だった労働が軽減されるということで、農家は盛んに導入し、東京のみならず高冷地でも販売された。またマメトラ農機（株）の堀取機他にも、独自に鉄工所等に製作を依頼したという例もあり、農家の関心が高い技術であったと言える。堀取機の導入によって生産を拡大できるようになり、各地でウドの専作化が進んだ。また 1961 年（昭和 36 年）頃にはジベレリン処理による休眠打破技術が開発されたことで、12~1 月の技術体系が確立され、さらなる出荷量の急増をもたらした。

## 第 5 項 出荷

ウドの市場出荷量は、戦前は東京、三重、埼玉、愛知であったが、戦後は東京、埼玉からの入荷が急増し、三重、愛知が減少した。そのため、東京都の市場占有率は 1954 年（昭和 29 年）～1957 年（昭和 32 年）の間 80%にまで達した。また戦後のウドは特に高値で取引された。これは戦前に入荷量が多かったことと、品質が非常に悪かったことが要因として挙げられる。一方で、東京の市場で値崩れが起こることを危惧し、保谷、小平、田無の生産者を中心に関西出荷の試みも行われた。当時の出荷方式は市場の要望によって、一貫目（3.75kg）入りの木箱が広く使われるようになった。しかし、1965 年頃になると、次第に段ボール箱出荷に移行していった。

この頃の東京産うどは上記の通り市場占有率が非常に高く、他の追随を許さない状況であった。また同時に市場の全ウド入荷量もまた最盛期を迎えていた。

---

<sup>19</sup> 川崎市にあった細王舎（数回の合併後、現在ハスクバーナ・ゼノア株式会社）が 1953 年（昭和 28 年）に米国の Merry Tiller と技術提携を行い発明した耕運機「メリーテラー」が農家の必需品として広く普及し、「テラー」と呼ばれるようになった。（東京大学農場博物館ホームページ, 2022 年 1 月 9 日閲覧 <https://www.isas.a.u-tokyo.ac.jp/museum/collections/bolens.html>）

<sup>20</sup> 現在の JA 全農東京の前身。

## 第6節 通減期(1970年末～1990年頃)

### 第1項 品種

1973年(昭和48年)に東京うど生産組合連合会が朝日農業賞を受賞したことを記念し、更なる東京都産ウドの維持発展を目指して新品種育成事業が始まった。東京都全域より有望と思われる11系統を選抜し、東京都農業試験場において特性検定を行い、「都」と「多摩」の2品種を選抜した。「都」は、経済性の高い品種の一つである「紫」と根株養成時の特徴が似ており、養成した根株には3~4芽付き、軟化茎の生産力は高い。軟化茎は乳白色で曲がりかほとんどなく、毛茸は細く少ない。また休眠は比較的浅く、上物ができる率も高いと言われている。「多摩」は、東京都農業試験場が長年全国から収集し保存していた中の一品種が元となっている。根株養成では、草勢が強く、強健に生育し病害の発生が少ないことから栽培管理が容易である。また根株には4~6芽付き、大きく立派なものが多い。休眠は比較的浅く、上物率は極めて高い。軟化茎は白色に近く、毛茸はやや粗剛、葉柄は伸びず短いため箱詰めがしやすい。また日持ちが良く、鮮度の低下がゆっくりであることも特徴である。

### 第2項 栽培方法・技術

1970年(昭和50年)前後に少しずつ見られるようになった栽培方式に半地下式軟化ムロでの栽培がある。従来のムロは自然条件を生かしたものであった一方で、人為的に環境を作り上げたムロであると言える。半地下施設は、保温性や耐風性を確保するために地表から60cm~1mほど掘り下げて設置された。設置場所は水利や電源が確保できるという点から選ばれ、幅3m前後、奥行き7~10m程度、高さは2m程度の大きさのものが一般的に建てられた。

骨格には鉄骨やパイプ、新建材を、外壁には合成樹脂の平板、波板、耐水ベニヤなどが用いられ、内壁には新建材の断熱材が使用された。屋根は雨が入らないようかまぼこ型になっており、遮光のために窓がない代わりに換気扇が設置されていた。出入口は引き戸またはドアで、地表面から階段で降りる形であった。

半地下軟化ムロは建物であるため根株や軟化茎、資材の搬出入が容易であり、天候を気にすることなく、中で楽な姿勢で作業できることが大きな利点であった。また保温性も良く、二酸化炭素の滞留もほとんどないことも良い点である。一方で、夏ウド栽培には温度が上がり過ぎてしまい、空調設備を設置しなければならなかった。また最大の課題は施設の建設費、資材費であった。

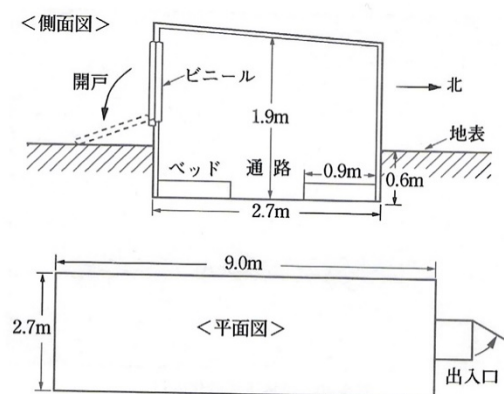


図5 半地下式軟化ムロ

### 第3項 産地・出荷

1970年代後半（昭和50年）からウド生産は東京のみならず、全国的にかげりを見せ始めた。元々出荷量の多かった東京産の減り幅は非常に大きく、市場占有率は50%台に低下した。この原因は、連作障害による収量の減少、委託経費などの増大、施設園芸による冬季の換金作物の増加、軟化時の酸欠事故などが挙げられる。これらの問題が重なることで、ウドだけの農業経営から、次第に他の選択枝にも目が向けられるようになり、耕地面積が減少していったものと考えられている。また、嗜好品の要素が強いため、洋食化、個食化といった食に関する変化に加え、家族形態の変容など消費側の変化にも影響されたものと考えられている。

さらに1985年以降（昭和60年代）も生産量の減少は止まらず、市場占有率は30%台まで落ち込んだ。特にバブル崩壊後には業務用需要が激減した。一方で入れ替わるようにして山ウドの入荷量が増えた。一般消費者への消費拡大を図るため、従来の80cmから60cmの短径種「大江戸美人」を作るなど試みは続いている。また出荷先についても、基本市場出荷だったが、1990年代には直売所ブームも到来し、直売所へ出荷する農家も次第に増えていったと考えられる。さらに少し先の2013年（平成25年）の小糸ら（2018）の調査では、東京うど生産者の出荷先内訳は、市場出荷が3割程度であり、個人客や直売所など市場外出荷が7割ほどとなった。従ってこの時期は、ちょうど市場出荷から市場外出荷へのシフトが頻繁に起き始めた時代だと推定される。

### 第7節 小括

ここまで東京におけるウドの導入から減少に転じるまでを、品種、産地、栽培方法・技術、品種という切り口から概観してきたが、特に品種と栽培方法・技術について考察しておきたいと思う。

品種については、愛知などの先進地から導入が繰り返されたり、都内で選抜されたりしながら、より良いウド品種が求められてきた。特筆すべきは、すでに1900年代前半には極上とされた品種の特徴に白いことが入っており、その後より品質が高いと評価される導入品種にも白いという特徴が入り続けているということである。これは、白さという点について特に追及されてきたということを示している。戦後までは品質の高いとされる品種の葉柄は伸びやすい、もしくは長いとされていたが、1900年代後半になると、箱詰めがしやすいという理由で短いものが評価され、また日持ちがするという要因も入ってくる。大量出荷しやすい品種が良しとされていた時代があったことを示している。

栽培技術・方法は、促成と白さのために追及され続けてきており、また戦後は大量生産の中で作業性も求められてきた。ムロは、土ムロ、溝式軟化ムロ、竪ムロ、穴蔵、半地下軟化ムロと変遷してきたが、温度の調整と遮光を効率よくできるものに進化し続け、ある時まではその新方式に転用が相次いで行われてきた。最後には、自然環境からの脱却を達成したと言える。しかし、現在のウド栽培を見渡してみると、少なくとも立川では使っている農家が

いるという話は聞かなかった。一見、半地下軟化ムロにはたくさんの利点があるように見える。たとえ建設する費用が高いといっても、農業機械を買うのとそれほど違いがあるとは思えない上に、まだウド生産が下降気味になり出した時期でもあり、新たな目玉として導入する動きがあっても良さそうだ。それでも広がらなかったことは単純に経済的に割に合わなかっただけではなく、他に問題があったことが推察される。従って、ただ品質と技術を文章として照らし合わせただけではわからないことが多分にあるということである。ここで参照したいのは、参与観察にてウド農家 Y が、半地下式などの施設で作るとウドの手（葉柄の先）が開いてしまうという発言をしていたことだ。このことから、農家の求める品質にならない技術として意図的に止められたことを示唆している。またこれは農家が穴蔵を選択してきたとも言える。この判断はいかにして下されてきているのか、本章以降立川市のウド農家のライフヒストリーや作業に注目して、分析を進めていく。

### 第3章 ウドの街 立川

#### 第1節 概要

立川市は東京都のほぼ中央に位置し、18万人を超える人口を抱える多摩地域の中心的市である。市の南側には多摩川、北側には玉川上水が流れ、平坦な地形が広がっている。国から首都圏の業務核都市<sup>21</sup>に位置づけられ、商業や業務などの集積が図られると共に、文化、研究、防災などの広域的な都市機能が整備され、拠点形成が進められている。JR立川駅周辺を中心に都市開発が行われ、商業が発展してきた。一方で、市内北部を東西に走る五日市街道沿いを中心に農地が広がり、さらに武蔵野の雑木林が残るなど緑豊かな地域が維持されている。



図6 立川市の位置（著者作成）

立川市の農業の中心である北部地域の農業の始まりは江戸時代の新田開発（当時砂川村）まで遡る。当時の武蔵野台地は地域は火山灰質の土壌に覆われていたため田畑として運用しづらく、また水源も乏しかったが、1654年に江戸の水の確保を目的に玉川上水が開通したことで、急速に農業地域として発展した。戦前の立川飛行場開設や終戦後の連合国軍基地としての土地の接収、またそれらに伴う急速な都市化など、紆余曲折しながら、農業が営まれてきた。戦前から穀物（麦、粟、稗、蕎麦など）や野菜（ウド、菜、大根、うり、ゴボウなど）、豆類（ダイズ、ウズラ、ソラマメ、アズキなど）、芋類（馬鈴薯、サツマイモ、サトイモなど）、さらには養豚や養蚕も盛んに行われてきた。

現在の農地面積は251.4ha（2020年1月時点）、農家数277戸、農業従事者413人（男性254人、女性159人）となっている。近隣北多摩地区17市<sup>22</sup>の中でも有数の農家数、

<sup>21</sup> 東京圏における住宅問題、食住遠隔化などの都市問題の解決を図るために、東京都区部以外の地域で、相当程度広範囲の地域の中心となるべき都市。1986年（昭和61年）に首都圏基本計画（第4次）において示された。（国土交通省ホームページ、2022年1月9日閲覧、<https://www.mlit.go.jp/crd/daisei/gyoumukaku/>）

<sup>22</sup> 立川市、武蔵野市、三鷹市、府中市、昭島市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、国立市、西東京市、狛江市、武蔵村山市、東大和市、清瀬市、東久留米市

農地面積、農業産出額ともに有数の実績を誇り、東京うど、ブロッコリー、植木の生産量については都内1位である。しかし、いずれも減少傾向であり、2015年からの5年間で農家数は60戸以上、農業従事者も170人ほど減少した。さらに農業従事者の高齢化は年々深刻化しているが、5年以内に農業を引き継ぐ後継者を確保している農家は、都内平均よりも低い3割程度にとどまっている。

## 第2節 東京うど

その中で特産物としての地位を確立しているのが東京うどである。1996年からほぼ5年おきに発表されている立川市農業振興計画においても、2015年から「立川農業の特色」に東京うど単独で紹介されるなど、立川農業の顔となっている。

第2章で記述した通り立川へのウドの導入は戦前であるが、本格的に始められたのは1950年（昭和25年）以降と考えられる。また1955年（昭和30年）以降、食糧不足の改善、ウドの高収益性、機械化などから急速に産地として成長した。産地が発展した要因は、当時の既存産地の都市化や機械化による重労働の緩和、肥料・薬剤などの発達等さまざまなことが考えられるが、その一つに地質的な特徴が挙げられる。立川市のある武蔵野台地の上部は、富士箱根火山を由来とする火山灰が堆積してできた関東ローム層で覆われている。そしてこの関東ローム層は粘土質でとても地盤が硬いという特徴を持っている。立川にウド栽培が拡大した時期は、新しい栽培方法として地下での穴蔵軟化栽培が盛んになり始めた頃である。崩れにくいため、深く穴を掘り、横穴の天井を高くしても問題ないことから、作業性がより良かったと考えられる。また温度や湿度が安定していることから品質の良い上物ができたと考えられる。こうしてウド栽培に最適な空間を手に入れたことで、都内一の生産地へと発展した。

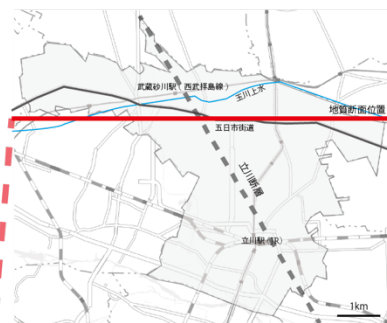


図7 立川市地図

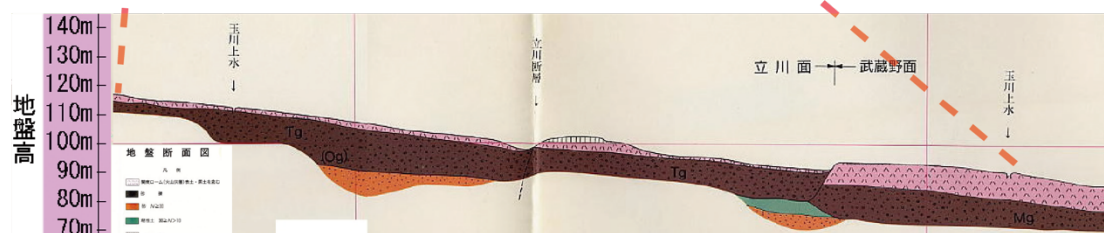


図8 立川市地質断面図（ピンクが関東ローム層・東京都建設局地質断面図に加筆）



西武、立川、丸八の3つのウド組合がはじめ結成され、その後立川市ウド生産組合を設立し、栽培から販売まで共同して事業を進めた。一時は全国一の生産量を誇ったが、1970年代中頃から生産量、農家数は共に減少し続けている。生産量は、最盛期の1972年は約570t<sup>23</sup>だったが、1990年代前半には200t<sup>24</sup>を割り込み、そして今では53t（2019年時点）<sup>25</sup>まで減少した。農家数<sup>26</sup>に関しても、1972年に100名を超えていたが、1980年頃に80名、1990年頃に60名、そして2000年頃には40名を下回った。そして現在では16名となっている。

ウド農家の立川市内の分布を、1995年（当時会員数39名）の組合員を町丁目ごとにまとめると図8のようになる。五日市街道沿いに東西に渡って広くウド農家が分布していた。半数以下となった現在では、例えば10件あった地区では5件にまで減少している。後継者がいない、いたとしても東京うどではなく他の作物に切り替えるなど、現状は厳しく、最も若い農家でも40代である。特産品としてPRしたり、加工品や飲食店とコラボしたりするなど取り組みは行っているが、厳しい状況は続くと考えられる。

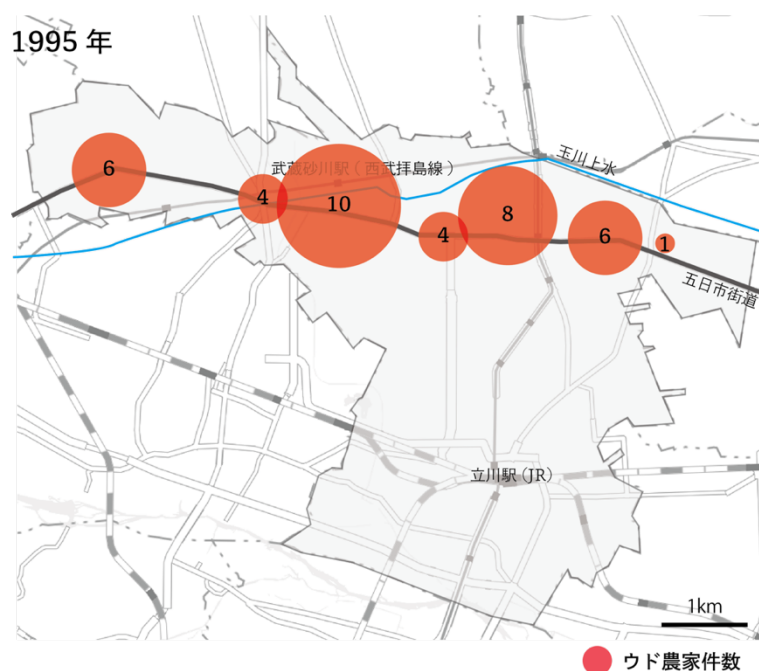


図9 1995年ウド農家分布（立川市うど生産組合，  
1995,『独活 二十年のあゆみ』より著者作成）

<sup>23</sup> 『東京うど物語』立川市出荷 c/s（箱）数より推定。

<sup>24</sup> 同上

<sup>25</sup> 東京都労働産業局農林水産部,2021,東京都農作物生産状況調査結果報告書(令和元年産)（2022年1月9日取得 <https://tokyogrown.jp/learning/library/>）

<sup>26</sup> 立川市うど生産組合組合員数から推定。（組合に入っていないウド農家、または組合に入っているがウドをやめた農家もいると考えられるがここでは考慮しない）



## 第4章 ウドとくらす

本章では、東京うど農家 Y の語りを中心にし、他の東京うど農家の語りも適宜参照しながら、東京うどとともに生きてきた生産者のライフヒストリーを記述する。



図10 インタビューを行なったウド農家の分布

表3 インタビューを行なったウド農家の基本的情報

協力者	年齢	ウド栽培歴	東京圃場（貸借含む）	ムロ数	出荷先
Y	50代後半	30年以上	約3a	2	個人、直売所、飲食店
K	50代後半	29年	約1.7ha	4	学校給食、飲食店、市場
N	50代後半	約20年	約3a	2	個人、直売所
M	50代後半	19年	1.3ha	2	個人
O	50代前半	22年	約1.2ha	5	市場、個人、量販店
S	40代後半	25年	約2.2ha	8(内貸借2)	個人、直売所

## 第1節 はじまり

Yが生まれる少し前の1961年（昭和36年）頃に当時20代だったYの父がウド栽培を始めた。それまでは産業が養蚕であり、あたり一面桑畑が広がっていたそうだ。またトマトなどの夏野菜の栽培、それ以前はさつまいもやお米を作っていた時期もあったという。しかし、小平市や国分寺市にウド栽培が広がってきたところで、立川市でもウドへ転換されていた。ウドの種の流通は人伝いだったが、非常に貴重なものであり簡単に「隣の人にやる」ものでも、お金で売買されるものでもなかった。したがって農家同士の信頼によって成り立っていたと言えるだろう。立川市でも先進地に親戚付き合いがある家から順々に栽培が始まり、Yの父も国分寺市の親戚から種を譲り受けることで始めた。Yの祖父も当時は健在で、出荷に使う木箱を作っていた。その木箱に藁を敷いてウドを詰め、初期は荷車、その後三輪車で神田の市場まで自ら出荷を行なったそうだ。砂利道を原付につけただけのようなもので荷を運んでいたため、途中で壊れるなど出荷するのも一苦勞だった。軟化栽培は最初から穴蔵軟化式ムロ（以下、ウドムロ）で行われており、西側に産地が拡大する過程で関東ローム層の存在が認識され穴を掘ったのだらうということであった。この頃のウドの位置付けは冬の貴重な換金作物というものであり、夏は野菜を作り市場に出荷していた。すなわち専作化には至っておらず、一作物としての意味合いが強かったと言えるだろう。

1964年生まれのYの幼少期、当時まだ母屋の蚕室で蚕を飼っており、それを見て「気持ち悪いなー」と思った記憶がある。一方で、ウドに関しては祖父が「コンコンコンコン」叩きながら木箱を作っているシーンが記憶に焼きついていて。従って、当時はまだ養蚕業が残っており、専作化の直前期であったと考えられる。その後小学生頃になると、入れ物が木から段ボールに変わり、その箱を「一束折ったら100円だ」と言って必死になって折った。さらに学生時代は手伝いを「しろっ」と言われながら手伝いをしていた。Yには兄がいるがあまり手伝わない方で、弟のYはどちらかというと嫌がらずに農作業をしていた。生まれた時から近くで作業を見て、手伝いもしていた身としては、仕事の大変さから「まあやりたくないなとは」思っていたという。

## 第2節 継ぐ

Yがウド栽培に深く関わるようになったのは急なことだった。大学卒業後測量士として働き3年ほど経った頃、父が荷をトラックに積み込む際に足を滑らせて転落し、足を複雑骨折した。その後すぐに出荷があるからということで、Yが急遽会社を休みウドの出荷を手伝うこととなった。「よくわかんないけど」「見よう見まね」で初めてウド出荷をした。その後も療養が必要となり作業ができないことから、「もうやめてやってくれ」と父に頼まれ、そのまま会社をやめて就農することとなった。

「まあ元々跡継ぎじゃなかったからね、俺はね。で親父が骨折して、手伝っ、まあとりあえず手伝えたのが俺しかいなかったから手伝っ、会社1週間休んで。でしたら3

か月ぐらいかかるって言ってさ治んのに。もう、もうやる、どっちかがやるしかねえなって。うちの兄貴なんか会社入ったばっかで、俺は、いいよお前に任せるからっていうからさ、えーっなんつって、俺が会社辞めて、で入ったんだけどさ。だからその時は何とも思ってたけどねとりあえずウドやんなきゃしょうがねえなって感じで、やってたんだけどね。」(2021/08/21 Yインタビュー)

Y は次男ということもあり後を継ぐだろうという意識は元々なく、兄が継ぐと思っていた。しかし、父の骨折は急な出来事であり、兄もちょうどアパレル業界の会社に入ったばかりだったこともあって、とにかく窮地を乗り切るしかない義務感と少しの諦めが入り混じる思いの中、家に入ることを決めた。今振り返ると当時は安易に考えていたというが、家に入った途端に地元での付き合いが怒涛の勢いでやってきた。若くして家に入った人にとっては、それが定番のパターンだという。幸いにも Y はそういった人付き合いが嫌いではなかったようで、さらに同級生二人が跡を取っていたこともあり「まあいいかみたいな感じ」という言葉の通り、軽い気持ちで地域の集まりに参加するようになった。地元の消防団は若い人の集まりであり、農業後継者が集まる会は同世代の知っている人も多かったが、一方ウド組合はまだ親世代がほとんどで、父の代わりに行くと酒を飲まされて大変だったという。ただそれら若い人の集まるコミュニティのおかげもあって、「嫌がることなく、すんなりと」という感じだった。市内では家に戻って農業を継ぐことが当たり前であり、「やらざるをえない」ものという認識を多くの農家の子供は持っていたようで、社会勉強のため少し勤めてから家に戻る人が多いということだった。一見ネガティブに捉えることもできるが、Y にとってはポジティブとは言えないまでもそれほど悪いものではなかったようである。

家に入った頃は東京ウドの生産量が非常に多く、Y の家でも今の 5、6 倍は出荷していたという。ウドムロへの伏せ込み方法や出荷様式は現在と少し異なり、ムロ内には奥から全面に伏せ込み、収穫は長さに関係なく入り口から 1 日で全て刈り取って築地に出荷していた。それを何回転もさせて大量生産を行っていた。当時は夏ウドと呼ばれる 6~9 月にも出荷を行っていたため、10、11 月を除き一年を通して東京うどの出荷を行っていた。特に品評会後の 2 月は、出荷に加えて次の年用の根株の掘り取り、種株作り、夏ウドの準備などを並行して行わなければならない、とにかく忙しかった。地下のウドムロだけでなく半地下ムロもあり、いかに量を作るかという勝負だった。今では野菜も多く作っている Y だが、当時は全く野菜を作る暇もなくウドだけを生産していた。さらに高冷地委託した根株を同じ地域の人の分まで数日間往復で運ぶこともあり、若手だからこその大変さもあった。

急遽家に入ってウド栽培に関わるようになった Y だが、父の骨折が治ると伏せ込みは父が行い、Y は補助役としてそれをずっと見ていた。完全に継ぐことになったのは、その 10 年ほど先、父が倒れ半身不随になってしまってからであった。ウド栽培に対しても「毎日ちゃんと気合いが入った」。大量生産、一括出荷は変わっていなかったため一人では手が回らず、時間のある友人を捕まえて手伝ってもらい、しばらくなんとかやっていた。その後、少

し量を減らしながら品質向上を目指すようになった。

### 第3節 極める

「最初まあとにかくいい、いいなっていうことは、まあやってるね。ただいいウドを作るためにどうしたらいいんだっていうその品評会っていうのに初めて行ってさ、で始めて自分家のと人のウド比較するわけじゃない？で何の賞にも入ってなくて、賞に入ったやつどうなんだみたいな、で見てじゃあもっとじゃあ評価を上げるためにはどうするんだっていうところをしこたま研究して、（・・・）ここまで来るのにはまあその相当試行錯誤は、やってきたよね。だから他の人に比べりゃね、なんか。」  
(2021/08/21 Yインタビュー)

Y が品質を高めるために力を入れてきたのはウドムロに関する作業が中心であり、最も技能の必要な工程であるという認識があった。試行錯誤をしていく大きなきっかけは始めた頃に行った品評会だった。自らの栽培したウドと賞を取ったウドとの違いに感心し、その後研究を重ねた。ウドの形や色、硬さなどは、光、空気の動き、水、温度などの微妙な違いによって変わってくる。何十年とデータを取りながら少しずつ技能を積み重ねた姿は「職人」とも言えるだろう。

「根根が、芽が真上に行くようにあのまあ言うこときかない根っこをもっとこうシュクってさ、クツてやってこう真っ直ぐ立つように、並べてくんだけど、あれは結構大変なところだったんだな、あれが適当だと最初のとこちょっとさ曲がるんだよね。そうすると箱入れた時ちょっと曲がっちゃったり」 (2021/08/21 Yインタビュー)

伏せ込みには真っ直ぐに成長させ、かつ出荷時に収穫しやすいようにするための技能があり、身体で身につけてきたという側面が強い。一方で、1m ほどの高さしかない横穴の中での伏せ込みは、体に大きな負担がかかり、長年の作業で Y の腰もあまりよい状態ではないという。

また、伏せ込み作業前後でも多くの工夫を積み重ねてきた。昔はウドムロの入り口には簾が被せてあるのみだったが、光が差し込まないように上にアーチ状に屋根をかけた。加えて、降りたところの各横穴の出入り口に遮光膜を貼った。さらに、ヘッドランプに新聞紙を被せて、生育チェックや収穫時にもできるだけ光が当たらないように工夫を行なった。水やりの回数に関しても、従来は1週間に1回が基本であったがデータを取りながら少しずつ減らし、ウドムロに入る回数を減らした。保水性を高めるために、伏せ込んだところから水が流れ出てこないようにもした。その結果、水を絞った方が産毛が柔らかくなり、切った時の瑞々しさや甘みが高まることがわかった。これらの試行錯誤の結果、品評会での見た目は他の人と歴然だという。これらの工夫は単に品質向上のためだけでなく、ウドムロ内での作業

が減ることで少しでも体への負担を軽減するためのものでもあった。

一方で、栽培の試行錯誤をする中でウドがほぼ全滅するという大きな困難にも直面していた。白絹病<sup>27</sup>が畑で蔓延しウドが全滅したため、その年は他のウド農家からウドを買い、なんとか出荷を行なった。その後、偶然ウドをやめるといふ農家がいたため根株をもらってタネを増やしたが、それは赤系のウドであり Y の求めている白系のものではなかった。そのウドを東京うどとして出荷することは許すことができず、結局、別の農家から白系の品種をもらい、増やすことにした。

栽培を試行錯誤する中で、昭和 40 年以降、病気や品種のバックアップをしてきたのが東京都農林総合研究センター（以下、試験場）だったそうだ。市内ではウド農家が多かったため、自然とウド栽培に関する情報が試験場に入るようになり、品種や薬剤などの研究が行われるようになったという。ウド農家はより良い新品種ができるように耐病性や香り、白さなどのリクエストを出し、それに応えて作出されたウドをその都度 10 株ずつ分けて栽培した。農家が良いと思えば増やし、いまいちだと判断すれば皆やめる。このようにして試験場とともに協力する形でも品質を高めてきた。今でも新しい品種や薬剤の試験は続いており、技術面においては東京都が担ってきたものは大きいと言えるだろう。

#### 第 4 節 安定とギャンブル性

「そのころは値段も安定して高かったんだよね。今はその、まあ直売してる相場で市場が買ってだから、こっちも、だってね、出す量も多くてさ。これは面白いなっていうね。箱で、朝 6 時から働いて全部切って全部荷造りしてトラック積み込んでシート張って築地行って、家帰ってくると 10 時半くらいだからね、夜の。…一番すごい時は 1 日で 80 万。200 箱持ってってさ。まあそんな時は帰り遅かったから帰って電話したら一箱 4000 円でうわー 80 万だよ、なんてさ。（笑い）面白えと思ったよ。ギャンブルっていうかさ。それこそ 200 箱持ってって一箱 1500 円ですって時もあったけど、したらがっくりもいいとこだけど。」（2021/03/13 Y インタビュー）

当時はウドの値段が安定して高かった。さらに市場では他産地のウドも合わせたその日の荷の量に応じて、せりによってその場で値がついた。季節に左右される作物であるため、12 月は出荷する人が少なく値が跳ね上がったが、年が明けると一気に値下がりした。朝早くから収穫、出荷準備、市場への持ち込みと一日中働いて、荷が少なく高値がついた時には歓喜し、大量にウドが積まれている光景を見た時には落ち込んだ。また別の日には、栽培に

---

<sup>27</sup> 数多くの作物で発生する菌類病。ウドでは根株養成及び軟化中に発生し、養成畑では発病すると夏から秋にかけて次第に樹勢が衰え、地上部が枯死する。発病株には地際部に白い糸くずのような菌糸がまわりつき、アブラナの種子のような菌核が多数形成される（農文協 2005）。

失敗して少量の出荷となった時に限って破格の高値がつき、「ちゃんとやってりゃあ、すげえ儲かったなあ」と羨望した。朝から晩まで忙しく働いた分だけ必ずしも儲かるわけではないが、それ以上の高値がつくことがある。しかもそれは出荷してみないとわからない。そういったギャンブル的な要素に Y は面白さを感じていた。その一方で、安値と高値の波はあるものの全体で見ると安定感を感じていた。やめたいと思ったこともあったというが、Y が始めてからしばらく売り上げは右肩上がり、苦労して作った分だけ儲けが増える状況だった。最盛期は 10 日に一回のペースで伏せこみ、毎日収穫をするという「どんだけやるかという世界」であり、ウドの経済性の高さがそれを後押ししていた。

## 第 5 節 変化

1980 年代以降、東京都が占めるウド生産量は大幅に減少を始め、苦戦を強いられるようになった。当時、既に高冷地への委託栽培は行われており、委託先の農家がウドの換金性の高さと品質の良さを聞きつけ、東京の農家から一部をもらうなどして栽培を拡大したのではないかということだ。もちろん拡大経路は定かではないが、それだけ他の地域への産地拡大が東京うどに与えた影響は大きかったと言えるだろう。

特に市場出荷量が増加した栃木県、群馬県では JA を通しているため、品揃えがよく、ランク付けもされており市場の評価は安定した。東京都のウド農家の間でも市場出荷する際のランク付けについて検討を重ね、品評会においても市場出荷を念頭に置いて評価を行った。Y 自身も栃木を見本に勉強したという。しかし、共選と謳っていても JA を通しているわけではなく、各農家の裁量によるところが大きかったこともあり、都内全体で揃えることは困難を極めた。同じ箱に品質がいいものと良くないものがあると、品揃えが悪いと認識されるのに加え、全体の評価も下がりかねない。さらに拍車をかけたのは市場での取引においてせりがなくなり、事前に出荷計画を通達するようになったことだ。東京都の農家は、それぞれの農家が出荷できるときにするというそれまでの出荷方法を続けた。一方で後進産地では、JA を通して出荷の日程や量を計画的にまとめることで、新しい方式に合致した出荷を行なった。その結果、東京うどは市場での取り扱いづらさから買い叩かれることになってしまった。市場では、「東京はダメだ」とひたすら言われ、また「昔はいくらでなんて売らねえよ」だったのが、業者の言い値で売るという「言いなり」になってしまった。果樹のようにせめて一年に一回は初せりの時に高値をつけることができたという希望はあったが、なかなかそうはならなかった。また高級野菜であったために、社会の流れにも影響を受けた。昭和天皇の崩御、バブルの崩壊、官官接待の禁止などによって料亭が減少し、それに伴って高級食材としてのウドの消費量は減少した。

市場での扱いやすさが重視される一方で、ウドそのものの評価は軽視されていった。

「客はさ、ムロで作ったのが柔らかくて全然違うからそれがいって言っても、仲買がなんかまあいい加減ていうかね。（・・・）やっぱムロで作ったのとまあ栃木が作った

白いうどじゃあどうやったってさ、柔らかさが違うから。白けりゃなんでもいいでしょって話なんだよ。(笑い)全部一緒ですよ。」(2021/03/13 Yインタビュー)

東京都のウドはムロで栽培しているから他産地よりも柔らかい。この点を評価してもらいたいという思いが強いものの、市場では白いという外見が一緒であれば全て同じものとして扱われてしまう。量を第一に重視する市場には、「量の時代は終わった」「いいものだからいい値段で買ってもらえる」という質重視の考え方に変わってきた Y のウド生産は合わなかった。「なんとかしてやろうと思った」という。しかし、東京都のウド生産農家全体の問題でもあり難しかった。だんだん気力も無くなってしまい、自ら作った HP を利用して安定した値段で販売し、市場へは余った分を出荷するのみとなっていった。Y だけではなく、他の生産者も次第に市場外出荷へとシフトした。

全体の市場出荷が減る中で、品評会も本来の目的とは違ったものに変わってきた。従来は市場出荷の際に品揃えを統一するためのものであり、ウドの長さや箱詰め仕方まで市場の要求に適合したものが表彰された。しかし、いつの間にか「芸術作品」を選ぶようなものになってしまった。例えば、本来市場からは箱の上の内壁に手が当たるとそこから傷んでしまうため、箱より長い部分は切るということが求められている。しかし、現在の品評会ではより重量を出すために作られた手が箱に入りきらないウドが並ぶ。以前は審査員の中に市場関係者もいたが今では来ていないため、市場出荷の観点からは評価されることもない。一番評価されるものは長くてまっすぐなものであり、市場には「不釣り合い」なものになっている。Y はそれが一番ではダメだということを繰り返し主張してきたが、自身も市場出荷しないことから今では諦めていた。また、品評会に出品し賞を取ったからといって、売り上げに何かプラスがあるわけではない。そんな高値ややりがいにつながらない品評会には出品しない農家もいる。各農家に品質が委ねられてしまっているが故に、品質が悪いウドも東京うどとして流通する可能性が高まる。Y はこうして全体の評価が低下することを危惧していた。

## 第6節 変える

「(…)直売所ブームっていうのがあって、ウドだけ作って直売所出してもさ、売れないんだよね。一回食べたら良いやって感じになっちゃうじゃない、旬のものだから。ほうれん草なら毎日食っても良いんだけど。やっぱでも作り方変えてかなきゃダメだなと思って。」(2021/03/13 Yインタビュー)

量から質へと転換し、生産量が減少する中で 1990 年代後半以降直売所ブームが到来し、一般消費者への販売にも目を向け始めた。はじめウドも直売所で販売したが、旬のものであり年中食べる野菜ではないため、あまり売れなかった。この状況を受け、やり方を変えてい

く必要性を感じるようになった。まず一つの試みとして Y を含む立川市のウド農家は「立川こまち」という短径ウドを独自のブランドとして作り、品質の高さから評価を維持しようとした。また Y は加工品でより知ってもらおうと考え、ウドの漬物とウドカレーを作って販売した。ウドの香りが活かせるものではなかったが、食べた際にウドだとわかることを重要視した。東京うどであるからこそ柔らかく、おいしかったと Y は強調する。高速道路のパーキングエリアで販売されるなど、だんだん売れるようになったが、作っていた会社が倒産しそこで終わりになってしまった。しょうがないと思いつつも、続いていれば東京うどがもう少し有名になっていたのではないかと悔しさは残る。それでも東京うどを有名にするという希望は持ち続けてきた。

「とにかく若い子にさ食べてもらわないと、まあ年寄りが食ってるだけじゃダメだなと思ってたんだよね。最終的にはなんつうの？ウドのチップみたいなさ、ポテトチップみたいにポリポリ食べれるお菓子系が作りたいなって思ってんだけど、なんかどっか乗っかってくれる企業がないと。あれがだからその揚げた時にさ、どうなっちゃうかわからない。でお菓子みたいにチップになるかどうかってね。でまあ最悪は立川野菜と、ね、と東京うど入り野菜チップみたいなさ、（・・・）なんかそういう方向に最後は持っていければ、やってる価値あんだろうなっていうね。」（2021/08/21 Y インタビュー）

Y の最終目標は手軽に食べられるお菓子系の加工品を作ることだという。とにかく若い人に食べてもらうために、そして保存性の悪いウドを長期保存のできる形で販売するために、技術的にできるかどうかは別として作れたらと考えていた。さらに東京駅や羽田空港で立川、東京のお土産として販売できることを思い描いていた。そして、これを目指すことが「やってる価値」であると考えていた。現状では、ウドを食べる年齢層は高く、日常的に食べられるものでもない。その状況を変えていくことが栽培を続けている者の役割であるという考えがあるのだろう。これは単に収益を高めるといことのみならず、新しい世代に新しい形で東京うどを浸透させていくことを目指しているという意味で、将来へどのようにして繋いで行くかという問題も含んでいる。従って Y にとっては現状をより良くすることと、東京うどが残っていくことを同時に達成しうる最適解の一つとして「ウドチップス」が存在していると考えられる。

さらに Y はウドムロでも試みたことがある。一つはウドムロの中で自然派ワインを楽しむという企画<sup>28</sup>である。また、より快適に見学してもらえようと、コンクリートを利用したムロ作りも行った。後者に関しては、先に地下の横穴の部分を十字に掘った後、その上にコンクリートを打ち、さらにその上に土を被せるというものだった。しかし、コンクリー

---

<sup>28</sup>立川経済新聞,2019,「立川の農園で「ウドフェス」ウドの室公開、自然派ワインや野菜、料理の提供も」（2022年1月10日閲覧 <https://tachikawa.keizai.biz/headline/2987/>）



トが天井に使われただけで、温度を上げようと火を焚いても温度が十分に上がらず、伏せ込みができなくなってしまった。こういった失敗もあるが、東京うどをどうしたら有名にし、さらに発展できるかということに対して、向き合っている。

## 第7節 東京うどを作り続ける

「俺はちょっと、（ウド栽培をやめることは）あんま思わなかったというか、まあウドやめちゃうと俺には何も残らねえんだろうなと思ってさ。トマトだったら、トマト30年やったやつに比べれば俺なんか素人みたいなもんだからさ。腰も悪いし、考えたこともあるけど、結局ウドならね、やっぱ誰にも負けない自信があるからね。これをやめちゃうのは、そうは簡単にはやめられねえなと思ってさ。まああと、まあそうじゃなくても件数が減っちゃてるから、下手すりゃねどんどん生産者減っちゃう。俺も辞めれば、またねえ、やめちゃうやつも増えんだろうなと思って。そこはちょっと頑張ろうかなと思ってるね。ウドだけは。」（2021/03/13 ヒアリングから）

Yにとってはウドを作るということは人生そのものと言っても過言ではない。現在の収入比率は不動産：農業＝9：1であり、農業収入のうち半分がウドである。Yが父とやっている頃は農業収入が今より大きかった。その頃と比べると、ムロが一つ潰れたことでウドの生産量は減ってしまった。経費はかかるが売り上げは上がらない状況が続き、確定申告をみて、「これはもう無理だよね」と気落ちしたこともあった。またウドの全体量が減ることで、将来的には東京うどの価値が再評価されることを予想していたが、地方の生産地からウドが安定供給され、需要はあってもそこに東京ウドが供給される余地がない。ウドは細かく調理されることもあって、品質で優位性を確保するのは簡単ではない。一方でYはムロで作っているからこそ一定の湿度が保たれ、他産地とは異なる見た目、皮の柔らかさが実現していると言う。そのYの理想とする品質を実現するために長年力を尽くしてきた。以前からトマトも研究しているというが、おいしいトマトを作る農家に何がいいのかいろいろ聞いてもなかなかうまくいかない。結局収入を上げて冬も安定的にやるためには、水耕栽培などに変えてかかりっきりでやらないとダメだという。そうするとウドに手が回らなくなる上に、やめなければいけない可能性もある。それは自分の首を絞めかねないためやめた。

「まあいろいろやったよなあ。本当はもっともっとウド知ってもらって毎日食卓に上るような理想を描いたんだよ。でどうやったらもっと知ってもらえるかなってのがあって、でーその室が見学できればいいなと思ったのね。しかも簡単に。こうはしごで降りるんじゃなくて、ドア開けてパーっと階段降りてったらウドを作ってる部屋がガラス貼りかなんかになってさ、見るって言うのは作りたいなって散々思ってたんだ

けど、まあ相当お金かかるだろうと思ってさ。あれは実現できねえなど、なんかそうすればなんかね、そういうのでできればいつでも見に来て、で上がカフェみたいになってみたいねなんかねレストランみたいになってみたいなのはイメージは描いたけどちょっとできねえなって。現実的には厳しいなって。」(2021/08/21 Yインタビュー)

トマトについて収入ということだけで判断すれば、今から始めても遅くはないだろう。また試行錯誤を繰り返せる、さらには想像力を持って理想を追求できるYであれば、本気を出せばトマトでもウド同様に年月はかかっても高品質のものを作れるはずである。しかし、もちろん年齢的なこともあるだろうが、Yはそうしなかった。Yにとって東京うどは人生ときって切り離せないものと言えるだろう。

さらに「やめるにやめられない感じ」も多少あるという。これは特産物として残すため、また今ついてくれているお客さんのためという外からの要求に応える必要もあるからだろう。中には栽培する工程を見に来た上で、Yの作る東京うどを評価し購入している都心のフレンチレストランもある。必ずしもYの想像していたウドの立ち位置ではないかもしれないが、Yが人生を通して追求してきた品質が確実に評価されている光景と言えるだろう。

## 第8節 小括

Yにとってウド栽培は生活の中心であった。若くして栽培を引き継いだ頃は、値が高く、大量生産、一括出荷で、苦勞しただけ儲かるという状況にあった。また市場の日々移り変わる価格の波に一喜一憂しながら楽しむことができた。従って、当初は経済性がYの栽培意欲を湧き上がらせるものであったと言える。しかし、その後、価格の低迷や需要減少などといった問題に加え、扱いやすさを優先する市場で優位性を発揮できなくなると、Yはより品質を重視する方向にシフトした。大量出荷の時期から、白さや柔らかさといった点については、他産地と違うという認識をしていたものと考えられるが、より意識するようになったのは、苦戦を強いられるようになってからであると考えられる。Yは良いと思ったことを積極的に行い、研究を重ねた。特にウドムロに関して工夫が多い。Yには必ずしも明確ではないものの、栽培を始めた頃に行った品評会の記憶をもとに、理想とするウドがあることが見て取れる。それは赤いウドを許せなかったことや、試験場にリクエストを出しつつも作出された新品種を必ず増やすわけではないといったことに表れている。またこの理想系は、あくまで市場での基準が根幹にあり、ただ東京うどとして存在していると言うよりも、他産地に品質で負けない東京うどという意識が潜在していると考えられる。その上で長年ウド栽培を行ってきたことは、Yの人生において大きな意味を持つものであり、やめられないという思いを持つものになっていた。従って、ウド栽培がマイナーサブシステム化していると言うことができるだろう。

またウドを一般の人に食べてもらうにあたっては、加工品を作ろうとしており、その上で重視されるのはウドであることであった。従って、これは品質がいくら良くても一般消費者には必ずしも拡大しない。逆説的には、市民一般にウドを食べる習慣が広がっても農家にとってはウドの品質を上げる動機にならない可能性もあるということである。その一方でより広く知ってもらうためにはウドムロを使った試みが行われていた。この対比により、ウド農家にとって重要なのは、ウドムロで作るということであるとわかる。そしてそれに付随して、他の地域に優位な品質がセットでくっついてくるという構造になっている。従って、上記で述べた品質を追求するというマイナーサブシステムの要素は、ウドムロで品質を向上させるということであり、ウドムロが前提とされていたと考えられる。それでは、そのウドムロを中心とするウド栽培はどのように行われているのだろうか。次章では、Yの下で行った参与観察から栽培について細かく見ていく。

## 第5章 東京うどをつくる

本章では第1節で栽培から出荷までの作業行程を概観した後、根株養成、ウドムロ軟化、種株準備の3節に分けて、2020年、2021年に行った東京うど農家Yのもとでの参与観察を通して得られた作業の内容、視点について記述する。

### 第1節 栽培から出荷までの流れ

東京うどの栽培は、種株養成<sup>29</sup>、根株養成、ウドムロ軟化の3つに大きく分けることができ、出荷まで約2年を要する。種株養成は次の年に育てる軟化用根株及び種株養成用のタネ（種株）を確保するために東京圃場で行われる。4~6月に定植され、11月以降に枯れた地上部の刈り取り、地下部の根株の掘り取りが行われる。その後、春までに一芽ずつ切り離し、殺菌剤で処理して冷蔵庫で保存し定植を待つ。

根株養成は軟化栽培用に根株を大きくするために行われ、基本的に群馬県にある高冷地圃場で委託栽培される。4月に種株を群馬圃場に運び、定植、除草、施肥、掘り取りなどの管理を行う。全行程にわたって委託先農家に一任する場合もあるが、種株の運搬や定植など一部の作業を自ら行う農家もいる。委託している間は何度か（月に1回程度）訪問し、生育状況を確認する。そして、11月になり数回霜が降りた頃に掘り取られ、東京に運ばれる。

軟化栽培は、地下のウドムロと呼ばれる穴蔵で日の光を当てずに栽培することである。群馬から運ばれてきた根株を芽の数や状態、根の重量などで仕分けた後、ウドムロ内に敷き詰めて並べる作業を行う。これを伏せ込みという。伏せ込みした根株に水をやり、その後数日間ウドムロ内で火を燃すなどして温度を上昇させ発芽を促進する。発芽した頃を見計らってムロ内に入り状況を確認し、水やりも適宜行う。収穫までの間、ウドムロには最低限の水やりや確認のみで、極力入ることはない。ウドは光が入る、空気が動く、温度が低下するなどのわずかな変動によって容易に品質が低下するため、それらの影響を最小限に抑えている。伏せ込んでから30日前後（月によって変動）で収穫となる。収穫された東京うどは光に当てないように注意しながら、袋に入れ段ボール箱に詰めて出荷される。

---

<sup>29</sup> 種株は次年度に畑に植えるための株、根株は伏せ込むために生育された株を表し、使い分けている。

表4 年間作業日程（2020年11月～2021年11月）

年	月	日	作業名	内容
2020	11	19	仕分け、仮埋め	群馬から戻ってきた根株を芽や根の状態で仕分けた。伏せ込みまでの保存のため土に仮埋めした。
		21	芽の剪定、根株ジベ処理	同じ大きさに揃えるため要らない芽を剪定した。休眠打破のため根株をジベ処理した。
		23	伏せ込み①	ムロ内に根株を植えた。
		24～26	火燃し①	温度を上げるため、ムロ内で火を燃した。
	12	3	ムロ内チェック①、刈り取り	ムロ内のウドの伸長状況を確認した。都内園場に定植したウドの地上部を刈り取った。
			12日後水やり①	
		17	枯れウド片付け	連作障害を防ぐため畑でウドの木を燃やした。
		24	収穫・出荷①	
2021	1	10	掘り起こし、根株ジベ処理、芽の剪定	仮埋めしておいた根株を掘り起こした。休眠打破のため根株をジベ処理した。
		初め	伏せ込み～ムロ内チェック②	伏せ込み、火燃し、12日後水やり、ムロ内チェック、出荷
	2	初め	伏せ込み～ムロ内チェック③	短径用根株。
		19	品評会	伏せ込み②から収穫されたウドを出品した。
		20	掘り取り	都内園場の根株を掘り取った。
		終わり～	出荷③	短径ウド。
		25～	種割	前年に東京園場で養成した根株を一芽づつに分けた。4月初めまでに終わらせ、割った種は冷蔵庫にて保存した。
	3	初め	伏せ込み～ムロ内チェック④	短径用根株。
		終わり～	出荷④	短径ウド。
	4	7	種株殺菌剤処理	来年の種株を殺菌剤処理した。
		22	株上げ、定植（群馬）	群馬県園場に種株を運び、定植をした。
			土壌消毒	土壌病原菌を防除するため土壌消毒を行なった。
	6	2	定植（東京）	東京園場に来年の種株用の定植を行なった。
		12	追肥、除草	追肥後、雑草を耕運機で取り除いた。
		25	生育チェック（群馬）	現地に行き生育状況を観察した。
	7	15	除草	雑草を耕運機で取り除きさくり上げを行った。
	8	10	追肥	追肥後、最後のさくり上げを行った。
		16	生育チェック（群馬）	現地に行き生育状況を観察した。
			泥上げ	収穫後に残った根株や土をムロから出した。
	10	15		掘り取りの順番と日程の調整を受託者と行った。
	11	12,13	泥入れ	ムロ内に伏せ込むための土を投入し、各横穴に分配する。

## 第2節 4月～11月：養成

### 第1項 定植（東京圃場）

ウドは毎年異なる圃場で定植される。それは連作障害が発生しやすく、2年続けて同じ圃場では養成できないからだ。Yも近所に圃場を借りることで自身の所有する圃場と合わせて、毎年種株の養成をする圃場を変えていた。さらに加えて、土壌消毒を行ってから定植を行うことで、連作障害の対策を行っていた。

定植する種株には大きくしっかりしたものと小さいものがあった。主に大きいものは伏せ込み用、小さいものは来年の群馬圃場に植える種株用だった。大きな株ができる群馬圃場だけでなく東京圃場でも植えるのは、リスク分散と作業性という理由からである。台風や土砂崩れなどによって群馬圃場のウドが万が一全てダメになってしまった場合に、次の年に種株を繋げることができるよう東京圃場でも栽培している。さらに群馬圃場では育ち過ぎてしまうため、伏せ込むための根株には最適であるが、種株用としては芽を一つずつに分ける際に硬過ぎて作業性が悪くなってしまう。東京では根株を小さく育て翌年の種株を作りやすくしている。種株の一部は定植前に一度土中に入れて、芽の状態を見ていた。その中で芽が伸びている、芽の先が日で焼けている、折れているといった芽は廃棄となった。

小さい種株は後ろ向きに進みながら溝に植えていった。両側の土を少し崩して床を作りその上に芽が上を向くように立てて種株をおいた。そして両側から寄せるように土を持っていき、根の方にしっかりかけ、そのまま芽の上に少し被る程度の土を持っていきかけた。種株同士の間は、約20cmと狭く植えていった。一方で大きい種株は前向きに進んで植えた。植え方は同じであるが、植えた後の土の山の裾から足袋一足分（30cm弱）と小さいものよりも広く植えた。作業は前傾姿勢で基本行うため腰に負担のある作業だった。3～4個くらいを同時に持って植え、それが植え終わったらまた少し離れた木箱に載せてある種株を取りに行くという繰り返しだった。歩く分だけ効率が悪いように感じられ、種株の入っている木箱を引っ張りながら植える方が良いのではと考えたが、歩いている間に腰を伸ばす時間が自然とでき、腰への負担が軽減されるということをYから指摘され、作業の中でそれを実感した。無駄歩きだと思ったものは意味のある往復であり、人の仕事では効率化がすなわち時間短縮ではないことを意識させられた。



図11 種株を選ぶ



図12 種株を植える

## 第2項 定植～掘り取り（群馬圃場）

Y は S 地区の他のウド農家とともに群馬県の同じ農家に以前から栽培を委託している。過去には栃木県でも行っていたが、土壌の性質と根株を掘り上げる機械の相性が悪く、根が途中で切れてしまうため数年でやめ、現在は群馬のみとなっている。ウドを委託している圃場の標高は約 600m。因果関係は明確ではないが、Y の経験では標高によって生育が大きく異なり、標高が高すぎる（800m くらい）とあまり育たず、株が小さくなってしまうということだった。気候において不安なのは台風と雨である。雨が多いと木（ウドの茎）がスーッと育ってしまう。そしてそこに台風が来ると簡単に倒れてしまい、脇芽が吹いて使い物にならなくなってしまう。過去には大雨で土砂が圃場に流れ込んだことでウドが埋まり、1 反全滅ということもあった。昔は一件で 4~5 反を委託していたためそれほど影響はなかったが、最近は量が減って委託する面積も少ないため、同程度の被害があると委託した根株が全滅することになる。前述の通り、そのリスクを軽減するために東京においても根株養成を行っている。

2021 年は Y だけで 600 株を委託した。作った種株はまだたくさん家に残っているが、ムロの数が限られることから全量やりきれないのに加え、自ら根株を取りに来ることができる量を基準にして委託する株数は決めていた。植え方は東京圃場の大きい種株を植えるのと同様で、一列に 60~70 株を植えた。定植後の管理は基本的にあまりなく、時折生長具合を観察しにいくのみだ。委託農家は他の作物も作っているため、草取りがどうしても後回しになってしまうこともあるとのこと、定期的に、草取りをしてもらうためにも 6~8 月には、通常月 1 回ほど見に行っている。圃場自身は作間が広いので日当たりがよく、根もしっかりと広がるようでウドはよく育つ。一方で草も生えやすいため、除草剤や耕運機を用いて草取りが行われている。耕運機での除草はウドの根元にさらに土が盛り上がってしまうことでしばしば問題になるという。その時点で既についている芽の上に泥がつくことで、芽がさらに上についてしまい、上と下の芽が離れてしまう。これは 11 月に地上部を刈り取る際に、芽を切られてしまうことにつながるということだ。

11 月に根株を東京へ運ぶのに合わせて、地上部が刈り取られる。約 2m に育ったウドは茎も太く鎌では切り取ることができないため、刈払機（草刈機）が用いられる。そして、専用の U 字の刃を取り付けたトラクタで掘り取られる。この際にも、機械のスピードや刃を入れる深さによって根を途中で切られてしまうことがある。長年栽培方法について、指導や要求を行うことで、それらの問題が最小限になるようにしてきた。現在委託している農家はベテランで、安心感があるということだが、それでも土壌の状態などによってはうまくいかない年もある。作業量的には楽になるものの、実際の作業をすぐに見ることができない委託であるがゆえの難しさと言えるだろう。原因はわからないということだが、群馬に委託する株数より戻ってくる株数は少なく、また伏せ込みに適さない廃棄となる根株もあるため、それを見越して委託を行っていた。大量出荷ではなくある程度顧客が決まっているため、必要以上に作らなくて良いということだった。

第3節 11月～3月：ウドムロ軟化

第1項 ウドムロの構造

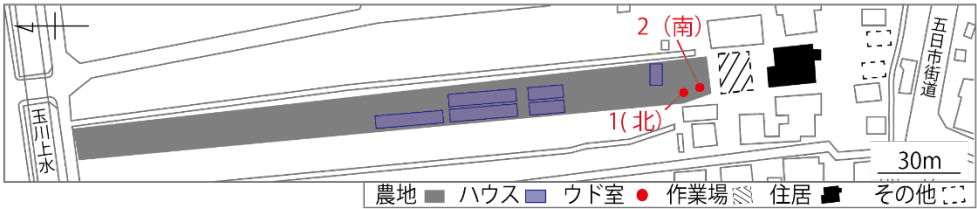


図13 東京うど農家Yの栽培環境

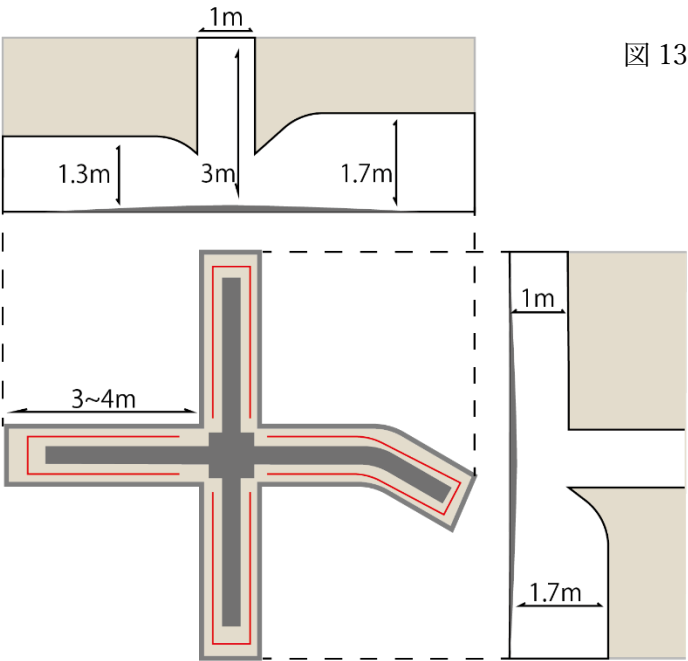


図14 ウドムロ（1北）  
の構造

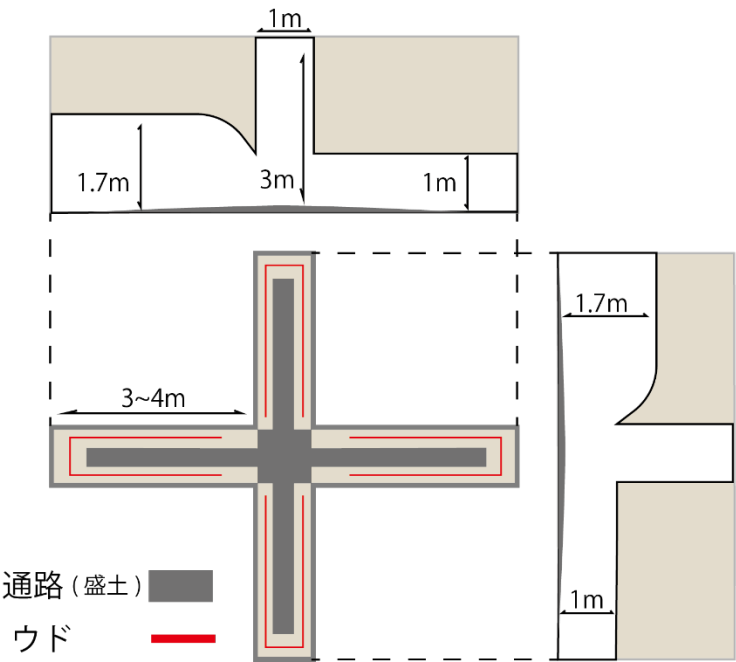


図15 ウドムロ（2南）  
の構造



ウドムロの大きさはどこの農家も平均して大体図 14.15 のものと同じくらいであるが、農家によって関東ローム層の厚さが異なるため、Y の家のウドムロは多少浅く、横穴の高さも低いものがある。大人が立って作業できる横穴をもともと持っている農家は数少なく、S のウドムロの横穴は基本的に 170cm ほどあるが、Y の家でも崩れたことで同等の横穴が結果的にできていた。崩れてしまう原因としては、ウドムロの上に竹林があり、その根が成長することで長い時間をかけて徐々に悪影響が出ているということだった。昔ウドムロを掘ったはじめの頃は、ウドムロが崩れにくい、光がウドムロ内に入らないなどの理由から竹林や雑木林の近くに作られたと言われているが、半世紀も経つとむしろそれによって崩れてしまうこともあるようだ。

横穴内のウドを伏せ込む場所は、Y は図の赤線の部分であるが、農家によって異なり、N の家では通路を片側の壁に寄せている。これは作業のしやすいように各農家を選んできたことである。ウドムロの立地の特徴としては、水を大量に使うことから住居に近いことが挙げられ、多くの農家では図 13 のような位置関係でウドムロが作られている。一方で、関東ローム層の厚さに左右されることから、住居から離れた場所に作った家もある。

## 第 2 項 根株の調整

11 月中旬、群馬から戻ってきた根株は年内伏せ込み用、年明け伏せ込み用、品評会用、短小ウド用などに分けた。ここで注目するのは、芽、根、そしてそれらのバランスであった。まず芽は、傷、伸び具合、表面の色から判断して仕分けた。ダンプ機能付きのトラックを使い一気に降ろすときなど移動を伴う際には傷がつきやすい。群馬から運ばれてきた直後のこの段階で注意して探し、傷のついた芽が多い根株は弾いた。またこの時点で芽が伸びてしまっているものは、病気またはカミキリムシ（以下、テッポウムシ）など何らかの外的要因によって害を受けているもので、廃棄となった。さらに芽の表面が白いものは霜への曝露や休眠が不十分な芽の可能性が高く、一方で茶色に覆われたものはそれらが十分で伏せ込み可能であることを示しているため、そこから年内に伏せ込むことができるかどうかを判断した。

次に根の状態を確認した。土壌条件や行う人によって、掘り取りの際に根が途中で切れてしまうことがある。そういった根株はすぐに伏せ込まずに年明け用に回し、年内伏せ込み用の根株は根が切れていない充実したものを選んだ。また、根を折り曲げた際に簡単に折れてしまうものはまだ休眠が浅いことを示しており、伏せ込みの時期の判断材料となっていた。最後は芽の数と根のバランスを見た。根株には複数個の芽がつく。根が大きいことは必ずしも悪いことではないが、大きさに対して芽の数が少ない場合、軟化ウド自身が大きくなり過ぎてしまい出荷できない。一方根が軽い、芽が細いものはスーパーへ出荷している通常の 80cm よりも短い商品向けに仕分けた。ここでは秤を用いながらも、ざっくり目測に近い形で判断した。芽に傷がつかないように気をつけて扱うように言われながら作業を進めたが、Y や一緒に作業をした Y の兄は根株を放り投げて振り分けていた。そんなにポンポン投げ

て傷がつかないのだろうかと疑問に思ったが、絶対に芽が地面などに当たらないように投げており、一見雑に見えた作業の中にただ丁寧に時間をかけるのではない多くの配慮が伺えた。

仕分けた根株は、年内伏せ込み用は約 10 日以内とすぐに伏せ込むため、日陰になる場所に積み、ブルーシートをかけて保存した。(冷蔵庫や土に仮埋めして保存することもある。) 年明け以降に伏せ込むための根株は、一度畑の一面に仮埋めして保存した。幅 1m、深さ 50cm ほどの溝に基本 1 列 5 株ずつ敷き詰め、50 株敷き詰めたら上から土をかけた。芽が霜に当たると傷むため、完全に隠れるようにかけた。敷き詰める作業は伏せ込みと同じ要領であるため Y が行い、その間その敷き詰める状況を確認しながら、根株を Y の背後に一輪車を用いて運び、置いた。



図 16 芽



図 17 伸びてしまった芽



図 18 テッポウムシに  
侵された根株



図 19 良好な根株



図 20 仮埋め

伏せ込み直前になったら、仮埋めして保存してあったウド根株を掘り起こした。手で根を何個か掴んで引っ張り出し、根の基を叩いて砂を払った。根株の重さを測り、約 1.6kg なら 2 芽、約 2.1kg なら 3 芽、約 3kg なら 4 芽に調整した。また極小の芽や先が欠けた不要な芽も剪定した。剪定する際は他の芽を傷つけないように、刃を下から上に入れ、基から完全に切り取った。切り取れていない場合、脇から小さい芽が吹いてしまう。同時に菌類病(特に菌核病)に冒されている証である菌糸と菌核(ネズミのフンに似ている)を見つけた場合、

その根株は除去した。ここで除去できずムロ内で発症した場合対応しようがないため、最後の砦と言える。

さらに、芽が休眠打破するために発芽誘導する植物ホルモンであるジベレリンに浸漬する。昔は濃度が濃い方がより良いとされていたが、長年続ける中でそんなに濃くせずとも有効に働くことがわかってきた。また浸漬する液体にはジベレリンに加え殺菌剤を投入し、菌類病への対策も行った。浸漬の手順は、根株が何個も入る大きさの深いプラスチックの樽にいったジベレリン殺菌剤混合液へ根株を漬け、隣においた同じ大きさの空の樽で液をある程度切ったあと、積んで保全した。水をかけてもジベレリンが洗い流されず根株に浸透するまで 24 時間、また殺菌剤処理をしてから出荷が可能になるまで 30 日間を必要とする。

### 第 3 項 伏せ込み準備（泥入れ）

伏せ込みで必要となる土（以下、泥）は、毎回伏せ込みに合わせて新しく外から入れる。以前は赤土が良いと言われていたが、現在では赤土と黒ボク土を混合した泥を用いている。ユンボを用いてムロに落とし入れ、それを各横穴内に振り分けた（図 21）。横穴の一番奥まで入れるのではなく、真ん中にある通路（底面より少し高くしてある）の先の少し手前まで入れた。これは、伏せ込みの際一番奥から根株を詰め、根が隠れるように上から泥をかけるためである。量の目安は通路の高さと同じくらいになるまで入れた。その間、石や根など不要物を取り除くとともに、ダマになった土を砕いて細かくしながら、進めていった。それほど長い時間の作業ではないものの、暗く狭い空間で完全に立つこともできずに行う力仕事は、通常より何倍もの疲れを感じた。

泥入れは、夏ウドをやらない農家にとっては、前春以来、約半年ぶりにムロに入る機会であるが、その際に天井が崩れていることに気づくことがある。夏の使っていない時期に崩れることが多く、Y のムロも以前は低くて立てなかったところが、この泥入れの時期（2021 年 11 月）には 170cm くらいと大人が立って作業できる高さになっていた。前述の通りムロの上にある竹林の根の伸長など原因はいろいろと考えられるが、近いうちに崩落することを Y は危惧していた。

### 第 4 項 伏せ込み

基本 2 人で行う。一人が上からクッションを敷いたムロの底に、芽が欠けないように、根から着地するようにして根株を落とした。そして、横穴の中で Y が伏せ込んだ（図 22）。全部同時に収穫ができしまうと大変なので、芽の数と根の大きさを見て通路側から収穫できるように調整する。例えば、芽の数は基本的に奥が 3 芽、通路側が 2 芽といった具合である。また、根株によって芽のついている高さが多少異なるため、横穴の高さに合わせて振り分けて、伏せ込まれる。全ての横穴に伏せ込んだ後、たっぷりと水やりをした。まず一横穴ごとに、全体にわたって均等になるように、次にもう一度全ての横穴を周って芽についた泥を洗い流しながらかけていく。

伏せ込み、水やりの完了後、穴の温度を常温に戻すために丸一日開け放しておく。その後火燃しを行う。火燃しはその時の寒さによって回数を変えるが、基本的には3日間、朝と夕方の2回ずつ行う。これ以上長い期間燃すと、芽が割れてきた時に火の明るさで下の部分が赤くなってしまう可能性がある。朝と夕方の2回燃すことで、夕方は朝の、朝は夕方の熾火<sup>おきび</sup>が残っているためムロ内の暖かさが継続する。これによってムロ内の温度は、一度30℃程度まで上昇し、1日半程度で20℃ほどに落ち着く。この20℃の状態では1週間ほど維持できるのが理想だという。

燃した直後は中に入って温度の確認を行いたい、ムロ内は酸欠状態であるため今は感覚で判断している。換気扇を回して入るという方法もあるが、それでは冷気を上から入れてしまうことになるため経験を頼りにしている。昔はロウソクを持って入ることで酸素の有無を判断していた。また電気が普及してからもYの父はライターをつけながらムロ内に入っていたという。過去には酸欠状態のムロ内に入り倒れた人や最悪亡くなった人もいたようだ。Y自身もムロを半分ほど降りた際に毛穴から一気に酸素がなくなり、足がキツくなって固まってしまったという経験があった。その時はすぐにムロの外に上がったためことなきを得たが、それ以来この時点でムロに入るのは控えている。

伏せ込み後腐った株にはテッポウムシ（カミキリムシ）が入っていることがある。根株が群馬より届き、邪魔な茎を切り落とす際に見つけることができれば良いが、根の中にいてわからないこともある。するとムロでウドが伸びてくる頃に上がってきて、腐らせてしまう。そのまま捨ててしまうとまた次年度も被害をもたらすため、押し切りで真二つにして鉄砲虫の有無を確認してから処理している。ひたすら切って確認する作業で見つかるのは数匹程度で、骨の折れる作業でもあるが、次の年の被害を軽減するためには重要な作業と言える。

ムロに伏せ込んでから収穫までの時間は伏せ込む時期によって変わる。11月中に伏せ込まれる年内出荷用の根株は22日ほどで出荷となる。11月中はまだ気温が暖かいためムロの中も同様に暖かく、約18℃を維持することができる。また掘りたての根株は早く伸びることもあり、年を越したあとに比べ10日ほど早い出荷となる。逆にこれくらいのスピードで発芽伸長せずに伸びがイマイチな場合、60cmくらい伸びたところで上から茶色くなって全て腐ってしまう。これは休眠しないまま発芽したことが原因と考えられている。したがって群馬から根株が届いてもすぐに伏せ込まずに、少し東京の寒さにも当てて休眠を促すようにしている。しかし、年内の出荷に間に合わせつつ、失敗しないように寒さに当てるその程度が難しいところでもある。22日という短期間で出荷することはできないものの、1週間ほど冷蔵庫で寝かすことができれば腐ることはなくなると考えられるが、それだけの冷蔵庫を作っても元を取ることは難しいと考えYはやめた。また上手く出たとしても手の部分が黒く腐ってしまい見栄えが悪くなるのは免れない。年を越してからの伏せ込みではそういった現象はなくなるためロスが減る。年内出荷には多くの困難がつきまとい高い栽培技能を要するため、行っている農家も少なく市内では5件ほどではないかとのことだ。その分年内出荷は、お正月需要があり値も高いため続けている。2020年の12月収穫のウド



の出来は悪いという。ムロ内の温度が下がってしまったことが原因のようだ。

一方で一度土に仮埋めし、年を越してから伏せ込む根株はだいたい 35 日での出荷となる。品評会のために 1 月の頭に伏せ込むが、地温が下がるため火を燃してムロ内を加温してもすぐに 16℃くらいまで下がってしまう。品評会に出すウドは伏せ込んだ後、極力収穫までムロに入らないようにしている。途中で入る回数が多い場合、ムロ内の空気が動くことでウドが汚れたり、赤くなったりする。そのため、途中で何度ムロに入ったかによって白さの違いは一目瞭然であるという。

#### 第 5 項 生育確認

伏せ込んでから 10 日前後でムロ内に入り、生育の確認をする（図 23）。事前準備として直径 15cm ほどのパイプをムロの入り口から底面に立てて、煙突のようにして空気の通り道を作る。また、光の侵入と空気の流れを制限するために各横穴の入り口到下から約 20cm のみ開けてビニールシートを取り付ける。生育状況を確認する際は、冷気の入りにくい日中の気温が上昇している時間帯を選び、出入りする時以外は入口を閉め、明かりはヘッドライトのみで行う。この時点で根株から白く糸状の根が伸びていれば、水をやる。まだ小さい点々しか見えない場合、数日で伸びてくると考えられるため、その頃に水やりを行う。さらにその水やりの 10 日後くらいでもう一度水やりをする。



図 21 泥入れ      図 22 伏せ込み



図 23 生育確認

## 第6項 収穫・出荷

東京うどの収穫はYによって行われた(図24)。根本を切り取り、木箱に入れ、ある程度の量になったところでウドムロの上から電動ウィンチを用いて引き上げ、すぐに光のあまり当たらない作業場に運ばれ出荷の準備がされる。根本はヒゲ根と傷んでいる部分を取り除き、先は傷んで黒くなっている部分を切り落とした。その際、強く握ってしまうとそこから変色してしまうため、力を分散させるために半分より先を手で持ち、根の方を太ももに当てて作業することで安定させる。そして、根の切り口が背面に来るように一本ずつ袋に入れた。そして、紫色の紙が敷かれた箱に詰め出荷準備が完了した(図27)。

出荷は年内出荷と年越し出荷に大きく分けることができる。年内出荷は一回の伏せ込みから収穫されるウドが12月中に出される。12月のウドはものとしてはあまり良いとは言えない。しかし元々は出荷時期が早いほど市場で高値がついたことから作られてきた。昔はお歳暮にと頼まれて無理して出荷した時期もあった。今は腐ってしまうリスクを考えてお歳暮には間に合わない出荷となっているが、年末の一年に一回の楽しみとして待っている消費者も多い。



図24 収穫の様子



図25 ウドムロから引き上げる



図26 出荷の風景



図27 出荷箱(4kg)

## 第4節 12月～4月：種株準備

### 第1項 刈り取り（東京圃場）

東京圃場で養成したウドは霜が数回あたり枯れ始める12月に地上部を刈り取った。地上部が完全に枯れて軽くなる1月に行うこともあるが、12月の方が茎が倒れていないため刈りやすいという。芽を傷つけないように刃渡りの短い鎌を用いて根元に刃を入れ、斜め手前上に引くようにして茎を切り取り、9株ずつ山にして積んだ。切り取った茎の断面が白いものは良い株である一方、中心部が黒く、カスが見られるものはテッポウムシの幼虫に食われており、その株全てが使えないわけではないが、何芽かは商品にならないものが出てくる。放置しておくとも口内で成虫になったり、次の年に再び被害をもたらしたりするため、幼虫が出てきたらその都度殺した。また、鎌を入れようと株を掴んだ際に、抜けたり折れたりするものは良い株ではない証拠であり、それらは根株も極端に小さいものが多かった。刈り取ったウドの地上部はしばらくその場で乾燥させ、その後圃場で焼却した。

### 第2項 掘り取り（東京圃場）・種株作り



図28 掘り取り



図29 種株<sup>30</sup>

地上部を刈り取った後に土中に残る根の部分掘り取った。U字の歯とそこから斜め上に伸びる棒が数本ついたアタッチメントを取り付けたトラクタを用いて、地面から40cmほどの深さに土をくり抜くようにして根を掘り出した。その後ろで根株を引っ張り出し、土を落とした。根を切らない、芽を傷つけないように気をつけつつ、掘取機の棒の部分に根を叩きつけて土を落とした。雨が降った場合その直後は土が重くなり掘り取りができないため、例年雨が降らない時期に行っている。2021年は2月の掘り取りだったが、暖かい日が多く芽が伸びてしまっている株もあった。芽が白いものが伸びてしまっているもので、一方赤みがかっているものは健全なものである。この年は芽が2個ついている株が多かった。

掘り取った根株から、一芽ずつに切り分けて種株を作った。一つの芽に対して1～3本の

<sup>30</sup> 参照：「みんなの農業広場」一般社団法人全国農業改良普及支援協会、株式会社クボタ（2021年1月7日取得 <https://www.jeinou.com/benri/others/2016/11/161410.html>）

根を残した。ヒゲ（芽の側面から出ている）があるもの、芽が少し尖っているものは、種株にしてもただ太くなるだけだったり作業性が下がったりするため、その年のうちに伏せ込み用の根株にするということだ。種株として切り分けた株は、殺菌剤に浸漬処理してから木箱につめて、冷蔵庫で保存した。そして、群馬へ運ぶ直前に段ボール箱に詰め直した。

## 第5節 小括

Yのウド栽培は、多くの作業で身体性の高いものであった。養成時には根株の数、ウドムロでの作業については伏せ込む際の根株の重さや水やりの目安、収穫の目安、種株作りにおいては掘り取りの刃を入れる深さの目安など、数値データがある程度の作業の型を形作りながらも、多くはウドそのものを見ることで判断を行っていた。その意味ではYをはじめとするウド農家が持っているのは技能であり、体系だった技術ではない。そしてその作業の中で最も東京うどを作り上げているのはウドムロだった。養成や種株準備では少しの失敗では致命的なものにならない一方で、ウドムロの技能はそのまま品質のみならず収穫できるかどうかにも関わるため、最も重要視されていると言える。さらに理想とするウドの品質についても、伏せ込みは農家の中で誰がやるのかがある程度決まっており、かつ明確にチェックリストのような確固たるものがあるわけではない。そういう意味では、農作業、ウドの品質ともに農家個人の感覚が重視される技能の上に立っているものと言える。ここまでウド農家の生活、作業に注目してきたが、それらの外側にある社会はどのような影響を与えているのだろうか。次章は、都市農業という文脈の中でいかにウド農家が存立しているのかを明らかにする。



## 第6章 都市農業をつづける

本章では、都市農業の置かれている背景について、都市政策及び農業政策から明らかにする。そしてその中で農業を営むウド農家の実情を記述し、どのような障壁があるのか考察する。

### 第1節 都市農地・農業に関する制度の変遷

東京都における農業および農地は、長年都市政策と農地政策に翻弄されてきた。1950年代半ば以降、都市への人口及び産業の集中に伴い住宅の需要が拡大し、市街地が無秩序に拡散した。これに対して、「農林漁業との健全な調和を図りつつ、健康で文化的な土地生活及び機能的な都市活動を確保すべきこと並びにこのためには適正な制限のもとに土地の合理的な利用が図られるべきこと」<sup>31</sup>を基本理念として新都市計画法（1968）が制定された。同法のもと、すでに市街地を形成している、または10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき「市街化区域」と市街化を抑制すべき「市街化調整区域」に分けられた。そして前者の区域にある農地では宅地転用が推し進められた。

急激な都市化の中で緑地やオープンスペースが急速に減少し都市環境が悪化したことを受け、既存の自然環境を積極的に保全するための施策が投入された。1974年には生産緑地法によって、都市生活環境の確保と将来の公共施設などの予定地として農地が計画的に保全されることとなった。その後、1970年代半ばから日本経済が低成長期へ変化したことから住宅需要が落ち着き、加えて農地保全活動の活発化などから都市農家及び農地への課税優遇措置が相次いで制度化され、農地転用の流れは一時落ち着いた。

しかし、1980年代半ば、都市部の地価高騰が再び問題となった。さらなる開発推進に転じるなかで、改正生産緑地法（1991）によって、市街化区域の農地は宅地化すべき農地と保全すべき農地（＝生産緑地）に区分され、前者はさらなる市街化を促進し、後者は30年間の生産緑地の管理義務を課すことで農地を保護しようとした。税制上も前者には、固定資産税の宅地並み課税と相続税の納税猶予制度の不適用という措置を取り、後者には継続して固定資産税は農地課税とし、相続税は終身営農を条件に納税猶予を行なった。これら都市化の動きの中で、都市環境に自然が必要であるという認識が社会的に広がっていたものの、あくまで緑地としての自然であり、農地はそのためのものでしかなく、それ自身として存在し続けることは想定されていなかった。すなわち不要なものと考えられてきた。しかし、近年この評価が一変し、都市政策、農業政策において農地の持つ機能が再評価され、都市農地は「あってあたり前のもの」、さらには「あるべきもの」（都市農業振興基本計画 2016）と認識されるようになった。

このように都市農地の位置付けを大きく転換したのが、2015年に制定された都市農業振

---

<sup>31</sup> 都市計画法（1968）第2条 都市計画の基本理念

興基本法である。本法では、都市農業の安定的な継続と都市農業の有する機能の適切、十分な発揮による良好な都市環境の形成を目的としている。翌年に策定された基本計画において、都市農業は都市部という立地条件を生かした少量多品目の作付け、都市住民への直接販売、事業者との直接取引などによる収益性の高い農業経営が特徴であるとしている。また、都市農業が発揮する多様な機能として、「農産物を供給する機能」「防災機能、良好な景観の形成の機能」「国土・環境の保全の機能」「農作業体験・学習・交流の場を提供する機能」「農業に対する理解の醸成の機能」の6つを挙げ、農地の役割が評価されている。

これらの維持及び発揮に向けて、「担い手の確保」、「土地の確保」の二つについて新たな方向性が提示されている。前者については、家族内だけでなく地域の農業者や新規就農者への貸借、地域団体や事業者の参入といった広く担い手を確保していく重要性を示した。後者は、まちづくりと連携した公有地化も含めた農地保全、無秩序な開発や未利用地を抑制する観点からの計画的な都市形成と農地保全、農業振興、さらには低未利用地や宅地の農地復旧までもを選択肢に入れた、土地の確保の必要性を示した。そして、これまでの生産緑地のみに適用されてきた主要な農業振興施策による支援を、都市農地全体へ転換する必要があるとしている。これらの新しい方向性を踏まえて、講ずべき基本的施策を定めた。施策には都市農地の多様な機能を発揮するための公益的な視点から定められているものが多いが、税負担のあり方や納税猶予といった税制上の措置や学校給食への利用をはじめとする地元消費の促進など、都市農地保全の一翼を担う農家に対する施策も示されている。

その中で、2017年には生産緑地法が改正され、生産緑地として農地課税を適用できる面積が引き下げられ、また生産緑地に指定されてから30年経過した農地は、買取申出可能時期を特定生産緑地として10年先送りにしてこれまで同様に農地を使用できるようになった。さらに2018年には都市農地貸借法によって、農業者への生産緑地の貸し借りが可能となった。2020年にも個人版事業承継税制の改正において、個人事業者の事業承継を促すために10年間限定の措置として、土地や建物、機械、器具など事業用資産の承継に課される贈与税及び相続税を全額納税猶予される制度<sup>32</sup>もできた。

このように都市農業を取り巻く制度は、農地は不要という認識から都市環境に必須のものであるという社会的な流れが形成される中で、大きく変わってきた。過去の制度下において、農業を続けたくても続けられなかった農家や、それでも苦悩しながら継続してきた農家がいるであろうことは想像に容易い。それでは上に示したような現在の制度になってからはどうであろうか。次節において、東京うど農家のインタビューから、実際の農家の声を明らかにしたい。

---

<sup>32</sup> 個人版事業承継税制の建物は、畜舎や農業用施設などを対象とする。事業用小規模宅地特例（相続により取得した事業用宅地の評価額を80%減額）との選択制となっている。

## 第2節 農地減少という「宿命」

表5 東京うど農家の収入比率

	収入比率（売り上げ）	農業収入比率（売り上げ）
	不動産：農業	ウド：その他
Y	9 : 1	5 : 5
K	8 : 2	9 : 1
N	8 : 2	2 : 8
M	7 : 3	2 : 8
O	8 : 2	3 : 7
S	0 : 10	6 : 4

「例えばね、もう専業農家ってほとんどいないんだけど、そう不動産収入源のところを全部売っちゃって畑だけ残して、それだけで頑張りますだとね。いやなんとかなるかもしれないけどね、それは大変ですよ。（・・・）そんな状態になってちゃんと子供達を大学まで出せることできるか都市農業でってなっちゃうと、大規模な土地が残っていればいいけど、一反二反残してたって」（2021/07/17 Kインタビュー）

インタビューを行なった東京うど農家は S を除いて、不動産収入を主な収入源としていた。農業収入だけで生活をしていくことは厳しいと感じており、その要因として労力にあっただけの値段で農産物が売れない、物価は上がっても農産物価格は上がらない、社会情勢に左右され値下がりが続いているなどの農産物の価格に関する問題が大きいようだ。また、中には農業（特に東京うど）は重労働が伴う、体が資本の職業であるため、怪我や病気などによってできなくなり収入が全く得られなくなるもののリスクを減らすためにも不動産収入に頼っているという農家もいた。

一方で、不動産収入を主収入としていても、生活をするだけならば農業一本でも生活できないことはないという認識をほとんどの農家は共通して持っているようだった。これは S が不動産を持たずに生計を立てている姿を見ていることや、親の世代の農業を見て育つ中で、農業だけで生計を立てられることが良いことという考えがあるからだと推察される。しかし、「朝から晩まで死に物狂いで働けば」やっていけるというレベルでの「生活できる」であり、現実的には今の面積では生活していく収入を得られないだろうと考えている。

その農地を確保しやすくするために生産緑地の貸借が合法になったわけだが、貸し借りが必ずしも円滑になったとは言えないようだ。O は実際に農地貸借の制度を使って立川市外に農地を借りているが、税金の問題や現に農地が減少し続けている状況を考えると、特別

借りやすくなったわけではないとのことだ。さらに Y も、高齢になってできなくなった農家の農地を借りてウドを育てられたらと考えているが、貸してくれる家はあまりない。貸してもらったとしてもすぐに返してくれと言われてしまうこともある。制度が変わったからといって農地確保はそれほど簡単ではないようだ。さらに不動産が欠かせないと断言するのは、税金の問題があるからである。

「もともと、本当に難しいと思うんだよ。この継続していくのはね。相続のためにもうだから、辞めざるを得なくなっちゃうから。」(2021/08/21 Y インタビュー)

前節でも説明した通り、農地については終身営農によって相続税猶予が受けられる。しかしここで問題となっているのは、農家たちが暮らしている家を含む宅地の相続税である。以前は「農地は3代でなくなる」と言われていた。農家やその家族が住んでいる家は宅地並み課税であり、相続税の猶予は適用されない。都市部であるがゆえに相続税は高く、自分たちの暮らす場所を守るためには、農地を売ってそのためのお金を補填しなければならない。そうしていくうちに所有している農地は少なくなり、農家として生活をしていくためには不動産収入に頼らざるを得なくなるという構図がある。「楽をしたいわけではない」、生活に多少のゆとりを持たせるための手段として、また生活を成り立たせるために不動産収入は重要になっている。しかし、この不動産によってさらに相続時には税金の締め付けが増大し(億単位の相続税となることもある)、農地を処分して対応せざるを得なくなる。こうして農地が減少し続けている現状や祖父母世代、親世代の相続の際に農地が激減した経験から、農地がなくなるのは「宿命」だという。

もともと土地、暮らしと結びつき営まれてきた農業にとって、現在の相続税の制度は農地減少を加速化させている一因と言えるだろう。それでもウドなら続けられることを K や Y は示唆していた。東京うどの軟化栽培は地下のウドムロで行われるため、農地が大幅に減少しても委託などで根株養成をすれば、続けることは可能であるということだった。

一方で農業収入のみで生計を立てている S は、不動産を「ギャンブル」と表現した。不動産活用での失敗例や、不動産を残すために農地を全て売ってしまった話などをたくさん耳にしてきたため、踏み出せないということだ。また親世代も農業のみで暮らしてきており、それを見て育った S にとっては、不動産という選択肢はほとんどないようだ。ただ生活を維持するために、休みなく働き続けている。

「親父に旅行もどこも連れてってくれねえって文句言ってたけど、俺もまた文句言われそうだけど」(2021/08/24 S インタビュー)

農業のみで生活を成り立たせていくために、休みなく働くと言う状況は先代から変わらない。他のウド農家も、S やその父の働きぶりはすごいものだと言えり。S がそれでも

続けられている理由は、性に合っているからだという。さらに専業で続けられている要因をウドに見出していた。以前よりも値が下がったとはいえ、野菜の中では、比較的ウドは高値がつく。そのためウドを主要農産物として作り続けているからこそ、農業収入だけで生活できていると考えていた。一方で他のウド農家同様に、相続時には農地を一部売って宅地分の高い相続税を払わなければならない、減少率は小さいものの、確実に農地は減少していた。

### 第3節 小括

都市農業に対する制度的な位置付けや認識が大きく変わってきたが、評価されるのは都市住民が享受する恩恵としての農業であり、農家という視点はかけている。結果として農家は一個人としての農業者でありながら、果たすべく求められる役割は生産力視点から、生産行為を通じて得られる副次的で公益的な機能へと偏向させられている（大石 1997）と言えるだろう。また、都市部に農地が存在することの意義を説明することはできても、それが直接農家の存続につながるわけではない。制度面においては、農家の要求に応えられている部分もあり、それら農地確保の円滑化や税制上の支援は農家にとって必要なものだろう。しかし、農家の間で最も大きな問題は自らが住む宅地の相続税であり、他の産業に比べ生活と密接に関係する農業においては、その点が変わらない限り農地がなくなる「宿命」は消えない。また日常生活のために収入を得るという意味でも、まだまだ厳しい。専業農家であっても、個人の性格に頼り切ってしまっているところが多い。また農地が減り続けているという点では他の農家と同じである。これらは農業がマイナーサブシステムにならざるを得ない根幹の原因であると言える。

一方で、都市農業の中で東京うどが残ってきた要因も明らかになってきた。ウドムロで育てられるがゆえに、都市部の農地が減少しても他の地域で根株養成することで作り続けることができ、またある程度高値で取引されることも大きな要因である。さらに、都市部であるからこそ日常野菜ではない高級野菜であっても需要が見込めるということである。従って、各農家の東京うどに対する思いなどに左右はされるものの、作物としては今後も細々と長く続いていく可能性が高いと言えるのである。

## 第7章 東京うどがひろがる

ある農作物が広がると言うとき、産地や栽培面積、販売場所などその農産物起点に広がる様子が真っ先に連想されるが、広がるものも、広がり方もそれだけではない。本章では、東京うどが立川市内で広がっている様子をより多面的に観察し、考察する。

### 第1節 ウドラ

東京うど栽培が盛んな立川市にはウドをモチーフにしたキャラクター「ウドラ」がいる。2012年に立川市が行ったオリジナルキャラクター公募に応募するためにつくられ、そこで2位、一般応募作品の中では1位となった。立川市の公認キャラクターにはなりそこねたものの、その後は立川市のキャラクターとして様々なイベントに参加するなど、立川市を盛り上げている。

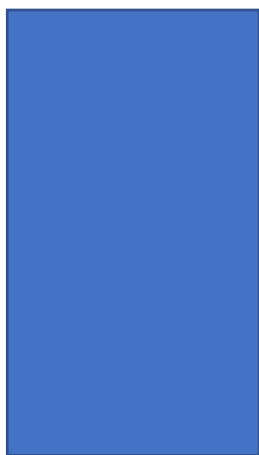


図 30 ウドラ<sup>33</sup>



図 31 ウドのレシピブック

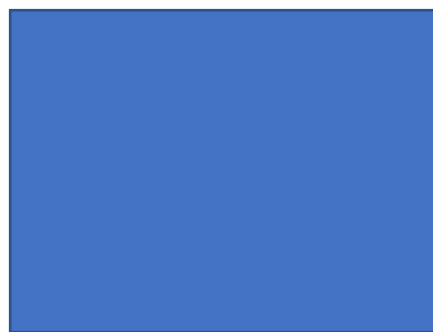


図 32 立川市内のイルミネーション

「ウドラ」の生みの親は立川市に住む一般市民のMである。ウドラをつくることになったきっかけは、Mの妻が立川市のキャラクター公募をネットで発見したことだった。M自身、キャラクターの絵を描くことがもともと好きだったこともあり、「やりなよやりなよ」と背中を押される形でつくり応募した。

「私自身がもともと立川市住んでたので、それで授業でうどの生産量が一位だなんだってというのは知ってたので。だから立川って言ったらウドかなってというのが最初からあったんですよね。で、私地方に住んだりしててそういう時に、立川には何があるんだみたいに言われて、特別ないけど強いて言えばウドかなみたいな感じで言って。ウドって言ってもいまいちどんな野菜かがイメージできないみたいで、言葉としてはウ

<sup>33</sup> 参照：ウドラHP (<https://udolla.jp/>)

ドの大木とかってそういう言葉は詳しい、みんな知ってると思うんですけど、実際のウドになるとあんま食べたことないっていう人も多いし。で同じ市民の人でも食べない、食べたことないっていう人も結構いらっしゃるので、（・・・）まずキャラクター作る前にモチーフはもう絶対まずウドだなと思って。」(2021/06/29 ウドラ関係者インタビュー)

立川といえばウドという感覚がMにはあり、ウドをモチーフにすることはすぐに決まった。それは子供の頃にウドムロに入った記憶が大きく影響しているようだ。当時は日常的に食べるものではなかったようで、食卓には上がらなかった。さらにウドのクセが好きになれず、苦手な野菜だったという。一方で、当時生産量日本一と言われていた東京うどは小学校で学習する対象となっており、社会科見学でウド農家に行きウドムロに入った。あまり覚えていないと言いつつも、地下にハシゴで降りた薄暗い場所で作っているという印象は強く残っており、なぜ畑じゃなくてそこで野菜を作っているのか意味がわからなかったという。その経験を地下冒険みたいだったとMは表現する。そういったインパクトに加え、キャラクターとしてウドは広がっていなかったこともあり、絶対ウドだと思った。

はじめは自分の子供を楽しませられるキャラクターを作ればいいやくらいの気持ちで、立川市で連想される防災や自衛隊と組み合わせて、ヒーロー路線で考えた。しかし、納得がいくものを作ることができず、締め切り間際で一から考え直すことになった。ウドがどんなキャラクターになりうるか考える中で、Mの中にあったウドの白くて怪しい雰囲気や、ウドムロで育つ神秘的で少し怖いといったイメージを表現しようとした。さらにみんなが可愛いと言うものではなくちょっと可愛くないもの、変なものが好きだというMの好みが合致し、他のキャラクターとは少し雰囲気の異なる、目が赤く真っ白な怪獣として「ウドラ」が誕生した。

締め切り直前だったため、一晩くらいで作り上げた「やっつけみたいな感じ」とはいうものの、本職のグラフィックデザイナーの知識と経験を生かし、審査で目立つための工夫や親しみやすくするための色の配置など、締め切り直前まで趣向を凝らした。前述の通り立川市の公認キャラクターとはなれなかったものの、「立川市公認なりそこねキャラクター」として、立川市に本社を置く2企業とともに立川市の地域貢献事業を行なっている。

Mは「ウドラは立川市のキャラクターである」という部分に強いこだわりを持っている。だからこそ「ウドラ」の役割は、立川の東京うどを盛り上げることと立川市を盛り上げることであると考えている。

「ちょっとでも、キャラクターが認知度上がるかなというのはあったんですけど。でもそうやって、市の子供達にちょっとずつでも馴染んでいければ、ちょっとずつは、まあ、市の子供達だけでもまずは立川のウドに、なんかなんて言えばいいですか、プライドじゃないですけど、ちょっと誇りじゃないけど持ってもらえればまたちょっと

ずつでも変わってくのかなと。逆に今まで何もやってないんだったら、これからその盛り返すチャンスというか、もしかしたら、なれたらいいのかなとは思いますが、まあウドラがどこまでやれるかわからないですけど」(2021/06/29 ウドラ関係者インタビュー)

このように考えるのは、東京うどをキャラクターに使わせてもらっているという思いを持っているからであり、立川のウド栽培が今後どうなっていくのか心配しているからでもある。「ウドラ」の認知度が上がることで、東京うどがより身近なものになって、馴染んでいってもらえたらと望んでいる。M が東京うどの特に価値を感じている点は、ウドムロで作り続けられていることと、農家のこだわりによって白く栽培されていることであり、「ウドラ」の白さにはこだわりがある。

農家に対しては、「ウド農家の気分を害することだけはやっちゃいけない」という思いが強く、最初の頃は怖くて反応を知ることもできなかったという。東京うどあつての「ウドラ」という考えが根本にあるのだろう。インタビューの中でも、市内のウド農家の名前や人柄、イベントでの発言などを細かく記憶していることが印象的で、常に農家を気にかけていることがわかる。最近ではウド農家とフレンドリーに会話できており、少しづつ受け入れてもらっているのではないかということだ。実際、東京うどの出荷袋やレシピブックにはウドラがプリントされ、ウド農家も「ウドラ」にもっと頑張ってもらいたいと口にしており、東京うどにとって重要な役割を果たしていると言えるだろう。

さらに、M が「ウドラ」で達成したいのは、立川を盛り上げていくことである。

「まあ私の今の気持ちはウドラを使って、まあ自分の子供はもうだいぶでかくなっちゃったんですけど、地元の子供たちが、立川市が好きになってもらって、毎日楽しいなって思ってもらえたらいいなと思ってやってるので。まああと大人の方もですけど。」(2021/06/29 ウドラ関係者インタビュー)

この地域振興活動と一緒にこなっているのが立川市に本社を置く 2 社である。このうち株式会社壽屋<sup>34</sup>（以下、壽屋）は、立川に恩返しするという会社の考えのもと、地域貢献事業の一環としてウドラのグッズを販売したり、SNS で発信したりなど精力的に活動を行っている。以前からイベントのスポンサーを行うなど、お金の寄付という形で立川市に貢献してきた。ウドラが生まれてからは、M とともに具体的な行動として地域を盛り上げる活動を行ってきた。ウドラの活動が東京うどを PR することにも、立川市を盛り上げていく

---

<sup>34</sup> 立川市に本社を置き、プラモデル、フィギュア、雑貨等のホビー商品の企画・製造・販売を主力事業とする企業。



ことにうまくつながっていると壽屋の S（以下、S）は言う。また、ウドラが地域のキャラクターとしてうまくいっている要因は、M とブランディングをサポートする市内企業が同じ方向を向いて活動できていることである。

S「原作の方がやっぱそれを、で稼ぎたいとかっていうのが入っちゃうと、うちもなかなか頼みづらいし、そうするとうちも動けなくなっちゃうので」

M「最初の担当の方に聞かれたと思うんですよね。まあどうしたいか。（・・・）私が言ったのは、えーと 10 年後でも立川市にその、うーんと、なんて言えばいいですかね、キャラクターとして残ってたいなというのを言ったんです。それでそこは別にお金がそんな、まあもらえるなら欲しいですけど、もちろん。ただそこを目的にはしないで、立川、ウドラを使って立川市がちょっとでも盛り上がったたり楽しい街になってくれれば自分の子供も立川市好きになるかなと思ったので、そういう感じでいいかなと思ってたんです。まあ今もそうですけど。そういう感じですね、だからそんなにお金にこだわりはないですね。」(2021/06/29 ウドラ関係者インタビュー)

壽屋は長年玩具業界で勝負してきたことから、ビジネスとして成り立たせることが難しいことはわかっているが、それでも立川市に恩返しできる地域貢献事業を行いたいという意思がある。一方で、M もお金にならなくても形としていいものを地域に残し、立川が少しでも盛り上がることを望んでいる。また両者はお互いの役割を尊重し合っており、壽屋は「ウドラ」を使わせてもらって恩返しができていると S は強調し、M も「神輿を担いでくれるかたがいる」からと、壽屋を含めた市内の企業 2 社のおかげだと言う。両者の要求が見事に合致したからこそ、うまく回っているのだ。

ここで注意しなければならないのは、ウドラもそれに伴う活動もあくまで立川市の地域振興という文脈で動いている側面が強いということである。それはウドラの作成に東京うど農家等の関係者が関わっていないと見られることや、農業とは基本的に接点のない市内企業が中心となっていることから推測できる。しかし、地域振興の一環としての「ウドラ」が広がっていくことで、東京うどまで効果が波及していることがわかる。

## 第 2 節 市内非ウド農家 Sn

Sn は立川市内の野菜をメインに栽培している農家である。現在は作っていないが、祖母の代までウド農家だった。祖父母は 1965 年（昭和 40 年）頃に手でウドムロを掘って栽培をはじめ、Sn が小学生だった頃まで続けた。当時は防空壕をウドムロにしている人も多かったという。また、よく後ろをついて歩いていた祖父には「勝手に入るな」と言われた記憶が残っている。しかし、1985 年（昭和 60 年）頃には腰に限界が訪れやめた。Sn の家は小平市や国分寺市との境に近いこともあり、昔から立川市内の中でも先行して新しい農

産物が入ってきた農家で、ウドも早い時期にやってきたようである。このようにある程度決まったルートから農産物栽培の波がやってくるなかで、小平が早いうちに見切りをつけたものが立川にきて名産になるということが結構あるということだ。近年ではトマトやブロッコリー、レモンなど、新しく特産品を作ろうという動きがあり、農家たちは苦心しながら様々な農産物に挑戦している。

この背景には、なんとか立川市がウドだけではないようにしたいという思いがあるようだ。また、ウドに関しても苦味を消した品種の作出が進んできたことから、「もうこんなウドじゃない」「ウドの味全然しないじゃん」というウド農家もいるとのことだ。それでも、特にここ10年は、「立川って言ったらウドしかないみたいな感じ」になっているという。それはウド農家が苦労しながら頑張っているからだとしてSnは説明する。インタビューの中でも、情報が間違っていたら「現役の人たちに」申し訳ないと、ウド栽培について安易に語りすぎないようにする場面もあった。

立川市ではブロッコリーや植木についても都内1位の生産量を誇る。しかし「ウドしかない」と言わしめる状況がある。立川市農業全体で考えると、ポジティブともネガティブとも判断はつかないが、農家の間においても東京うどが確実に広がり、根付いていることを示している。

### 第3節 立川市

立川市では、東京うどの生産農家数、生産面積、生産量いずれも減少しており、この傾向が続くという想定から、様々な側面から関わりを持ち、また支援を行っている。まず、立川農業振興会議及び立川市認定農業者協議会において、他の生産団体同様にウド生産組合からも常に1名の委員が推薦されることになっており、立川市の農業振興に関する具体的事項に対して意見を反映させている。また、市議会議員との意見交換の場も設けている。毎年2月には、立川の特産品であるウド栽培の普及奨励、品質の向上を図り、農業経営の合理化と安定を促進することを目的として、立川市ウド品評会を開催している。市内の学校においては、小学校3年生の社会科見学の一環として、ウドムロ見学を行い、学校給食にもウドを使用している。ウドのPRについては、市報（広報たちかわ）にてウドに関する記事の掲載を不定期で行ったり、ウドラに市のイベントに登場してもらったりしている。さらに、市の職員の名刺には立川の街並みが印刷されており、その中にウドムロも描かれている。

ウド農家への支援については、ウド農家のみを対象とするものと他の農作物にも共通するものとを併用しながら補助金交付を行なっている。具体的には、ウド根株委託、有機堆肥、薬剤、出荷用ビニール袋の作成などに対して補助をしている。

市内農地の減少は続くと想定し、少しでもそのスピードを遅らせるべく、都の補助事業も活用しながら支援していくということだ。また、2021年よりたちかわ農業全体をブラン

ド化する事業を進めており、それを活用して消費者や地元飲食店に向けてPRなどを行なうことを予定している。

立川市においても、他の農産物、農業形態同様に支援を行なっているが、同時に特産物であるウドは部分的に特別扱いすることで、保護しようとしている。立川市にある農業、東京うどを守るということは、単に市民の活動を守る以上に、立川市のアイデンティティを確保するためにも必要とみなしていると考えられる。

#### 第4節 小括

立川市内では東京うどがある意味観念として広がっており、立川市と東京うどが容易に結びつくものとなっていた。それはウドラ作者Mがキャラクター作成時に、Snが特産物を思い浮かべる時、それぞれ「ウドしかない」と思ったことからわかる。また、それに加えて、ウドムロのイメージが両者に付随していることもわかる。ウドラにはウドムロという生産空間があるが故にその形になり、Mの意識では白いことと同時にウドムロで作っていることが大きな特徴なのである。Snにおいてもウド栽培が大変という発言があり、かつ祖父母が腰の問題でウド栽培をやめたということを知っていることから、ウドムロでの作業も大変な作業として認識していると考えられる。これらのことから、立川市、東京うど、ウドムロが一つの塊として認識されていると考えられる。

一方で立川市政としても他の作物とは違う、歴史や文化を保持した特別なものとみなして支援や様々な施策を行なっていることから、立川市を表す重要な一要素として今後も継続していくことを望んでいることがわかった。また、小学生の社会科見学ではウドムロ見学が目玉となっており、ここでも東京うど栽培にウドムロが重要な要素として存在していることがわかる。

これまで、東京うどを中心に農家の生活、作業を細かく観察し、そして社会の中における東京うどの認識についてまとめてきた。その中でウドムロが重要な空間として存在していることがわかってきた。それではそのウドムロは東京うどにとってのなんであるのか。将来への継承という点に着目しながらまとめ、考察する。

## 第8章 東京うどをつなぐ

### 第1節 将来へ

「こうなっちゃってるのが今現実だと捉えれば、もうこれでしょうがないのかなと思うとなくなっちゃうじゃん。ウドなんかほとんど」(2021/10/09 Oインタビュー)

Oがここで述べている「こうなっちゃっている」状況というのは、ただウドが減少していることだけを示すものではない。「時代の流れ」、社会の「豊かさ」、「個人経営」、「社会情勢」など自分たちを取り巻く現実全てを示している。すなわち自分ではどうしようもない状況が既に作り上げられてしまっているという表明である。O含めインタビューしたウド農家からは、「どうしようもない」と言う感情が滲んでいた。個人の好き嫌いややる気によって選択がなされることが本来の形だろうが、それ以前に税金の問題、それによって農地が減少している現実といった自分だけでは解決できない問題が大きすぎる。従ってウドはなくなっていくだろうという想定が大勢を占める。

それでも歴史や文化といった意味から「どっかで歯止めをかけな」ければならないという思いは持っている。日本の食文化の一つとして、立川の歴史として、また市内小学生の教育として残さなければならないという思いは強い。その方法として、多くの農家が挙げるのが集まって取り組むということだ。個人だけでは、ウドを推進していくことはおろか、栽培も難しくなる。小さいレベルでは、辞めずに細々であっても続けて、地域の中で継続の相乗効果を発揮する土壌を作る。より大きなレベルでは共同で栽培を行う。そして大きなレベルとして、立川市だけでなく東京都全体で推進できる形に持っていく。各農家の想定しているレベルは違うものの、結果的に集団としての東京うどにつながるのは特徴的だろう。食料としてのウドを超えて文化、歴史、教育といった社会的に必要なものとされる姿は、農業の役割が偏向(大石,1997)させられた姿とも言えるかもしれないが、ウド農家たちはそれを個人の役割ではなく集団の役割として捉えていると判断できる。現在生産組合として集団になっているが、各農家の想定する集団とはその範疇を超えたところにあると考えられる。一方で、その前提として後継者に繋げていかなければならないとSは言う。

「やっぱ生活できるような職業にして行かないとね、続かないよね。結局農業も。ただやってますじゃあ。みんなの食糧作ってますなんて威張ってたって金ん何なきゃしょうがないんだし。やっぱそれで生活できるっていう、農家が子供に見してかないと継いでくれないだろうな。じゃあサラリーマンの方が良いじゃんて。」(2021/08/24 Sインタビュー)

Sはインタビューした中で、唯一農業収入だけで生活をしているウド農家であるが、農業

を、すなわち東京うどを維持させていくためには、農業を職業として生活ができるものになければならないという。ここで注目すべきは、国民の食糧生産を担っているという思いは農業を続けていく要因としては不十分であるということである。従って農業が社会にとって恩恵があるだけではなくて、農家にとっても恩恵があるものでなければならぬと言ふことだ。確かに農業において経済的に自立するということは重要なことであるし、実際今現在それを実行している S の言葉は重い。しかし、ここで捉え間違えてはいけないのは、S が意図しようとしまいと継承できる要因は経済的要素のみではないということである。なぜなら不動産を持ちながらも農業をし続けている農家が多いからである。では、農業収入は小さいもののウド栽培を続けている農家はどのように後継者について考えているのだろうか。

「俺の子供がウドやってくれるまで現役でいれば。(・・・) 希望はね。希望を言うならね。俺の子供がやってる頃なんかもう指折りくらいしかいなくなっちゃうんだろね、多分。」(2021/3/13 Y インタビュー)

Y はウド栽培を子供に継いで欲しいという希望を少なからず持っていた。これは他のウド農家にも共通する点であり、多かれ少なかれ継いでくれることを望んでいた。しかし、必ずしも「ウドを」というものではなかった。子供の意思を尊重したいという思いもあるが、それよりまず置かれた現実を踏まえた上で、濃淡を持って希望が語られていた。

最も影響しているのは相続によって農地がなくなっていく現実である。相続を 2 回経験した N は、「こんなに持ってかれるんだ」と想像をはるかに超える農地が、税金を払うために無くなった時のことを話す。また、近所で後継者が農業を継いでもウドは辞めてしまう姿を見ていることもあり、ウドを継いで欲しいというのはそんなに簡単ではない。Y はウドを継いでくれたらという希望と同時に、農業の「いち、に」だけは最低限教えておかなければと言う。これはウド以前に農業、農地だけはつないで欲しいという思いがあるからだと推測される。そこには、親の農業をする姿を見て、先祖から引き継いできたものを簡単に途切れさせる訳にはいかないという思いもある。一方で農地がなくなってしまうことは「宿命」であり変えられないこととして、子供には他の道を進めている農家もいた。

このように「宿命」の前では、「ウドを継いで欲しい」はもちろん、「農業を継いで欲しい」ということさえも言えない状況が形作られていると言える。すなわち二重の壁があると言えるだろう。従って、不確実な後継者の部分は置いておいても、まず現在世代が続けていくことを重視する様子が見られた。その中で、法律が変わり農地の貸借もできるようになったことから、自分の家だけではなく第三者へ継承するという新しい形を視野に入れている農家がいた。そして、それが実現されている地域が大阪にあった。

## 第2節 継承された三島独活（大阪府）

N 夫妻（以下、夫 Nd、妻 Ny、二人の場合 N）は大阪府茨木市の千提寺で地域の特産物であり、伝統野菜でもある三島独活を継承し、栽培している農家である。二人が農業を始めたのは 2015 年で、それまで Nd は化粧品メーカーの研究職、Ny はコンサルティングやマーケティングの仕事をしていた。最初のきっかけは 2013 年に茨木市千提寺の Nd の実家に戻って住むようになったことである。「軽いノリ」で千提寺に U ターン移住したものの、その頃周辺では新名神高速道路、安威川ダムの開発計画が進行しており、それまでの地域が様変わりしていく将来を目前としていた。N は地域がなくなっていくことに無力感を抱くと同時に、そういった「全ての理不尽を受け止め」つつも、地域に根ざした仕事ができないか考えた。

ちょうどその時、地域の特産物である三島独活を作る唯一の農家がやめるという情報が舞い込んだ。三島独活は地域から愛され、軟化を行う独活小屋は地域のシンボルでもあった。何とかして残したいという思いから、三島独活農家になることを決めた。また、当時 Ny のお腹には子供がおり、出産してからでは子育てに追われてやりたいことが制約されたり、仕事をなあなあと続けてしまったりするかもしれない、今しかないということで二人して仕事をやめた。

Nd 「難しそうだなというか、なんなんて。これ農業なん。」

Ny 「知らなかったからやるって言えたな。やり始めたらしょうがない。」

(2021/12/2 N インタビュー)

この決断はよっぽど急なものであったようで、それまで三島独活を作ることを見たことはおろか、知りもしなかった。初めて見た時のことを二人は笑いながら振り返る。こうして栽培の修行をする 2 年間は収入ゼロの見込みの中、ウド農家としての人生が始まった。2015 年 1 月から Nd は最後の三島独活農家（以下、師匠）に弟子入りして修行を開始した。その間、Ny は Nd がバイトなどせずに栽培技術の習得に専念できるよう、身重ながら個人事業主として「農業と地域に関係する仕事します」と言って、以前の職場の人から仕事を紹介してもらって働き、また第一子出産後も産後 2 週間で仕事復帰し、食い繋いだ。

Nd は 2015 年の 4 月から「あんたはあんたの株を持ちなさい」と師匠に言われて植え付けを始め、2016 年は師匠の根株とともに Nd のものも一緒に伏せ込んだ。こうして修行を経て、2017 年には独り立ちした。三島独活の栽培方法は江戸時代から続く伝統的なもので、化学系資材や電気などを使わないため最も自然な方法と言える。まず田んぼに独活小屋と呼ばれる藁とシートで光を完全に遮断したハウスを建て、その中にウド根株を伏せ込む。伏せ込んだ後、その上に藁と干し草を乗せてその発酵熱のみで発芽、伸長させる。温度は温度計も使うが、最後は手の間隔を頼りに確認して、適温となるように調整する。こうして 45~50 日ほどの日数をかけて出荷に至る。出荷まで全く見えない、まさに「ブラックボックス

ス」であり、「継承しようがない」技術だと感じることもあるそうだ。しかし、そうやって外気に全く触れずに生育することによって、皮が柔らかく、あくが少ない、ナシのような甘味を感じる品質が実現している。このように感覚に頼るところが多く、それは長い経験を要することを意味する。一人で伏せ込むようになってから、温度調整の失敗や災害、病気の蔓延などもあり、なかなか思うように行っていないようだ。それでも感覚でやっていることも魅力と考え、ポジティブに捉えている。

「人の感覚でやるっていうのが魅力の一つ、個性豊かなものができたのに人間側が楽しむ。できが悪いのもおもしろいなと。」(2021/12/2 N インタビュー)

当初はIT 機器などを用いて細かく計測することも考えたが、よくわからないものの方が面白いということで、伝統的な方法を維持している。そして、こういったリスクも含み込んだまま栽培を続けていくために株主制度を導入している。栽培方法を理解し、かつリスクまでも一緒に背負ってくれる株主を募り、一株につき一根株分のウド (500g) を送るということになっており、うまくいかず重さが減ってしまった場合は、その重さ分を送るという形だ。株主の多くは「ウドがいい」というよりは「栽培がいい」と言って出資している。N は、株主がいることにより失敗が許されないプレッシャーを感じるとともに、いるから続けられていると考えている。今では、全体の半分を株主と一般客に、残り半分を飲食店に販売している。



図 33 独活小屋

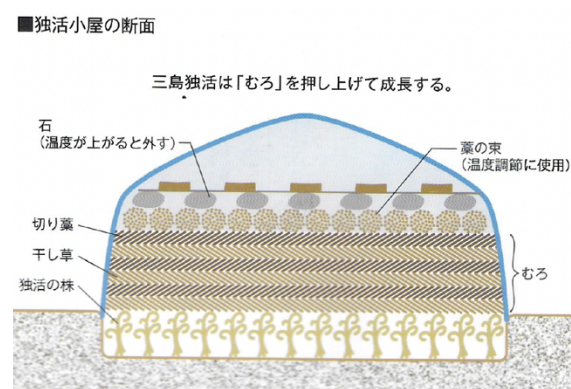


図 34 独活小屋の構造

(『大阪食べる通信 第 6 号 2020 年 3 月』より)

この株主制度や飲食店とのつながりを含め、N にとって三島独活を作ることはコミュニティづくりであるという。独活は「独りで生きる」と書くが、一人で生きられないのを伝えるために、ウドはちょうどいいものだった。すなわちツールという側面が強い。このコミュ

ニティ作りはウドだけに限らず、地域の自治会の中で（地域民の緩さに助けられながら<sup>35</sup>）積極的に発言し活動したり、養鶏農家や税理士の仲間とともに「面白くサバイバルできるコミュニティ作り」を掲げ一般社団法人を運営したりするなどさまざまな取り組みをしている。

従って、気候変動などでウドが作りづらくなり、さらに他のものが必要となれば「全然ウドやめる」とのことだった。もちろん N 自身作れる限り作りたいという思いはある。しかし、ウドは嗜好品であり、なくなって一番に困るものではないことから、社会が豊かでないと残っていかない。今後の気候変動やそれに伴う食糧難、更なるパンデミックなど起こりうる将来の困難を想定した時に、そうなってまで続けられないということだ。また子供たちにも継いで欲しいとは言わないとのことだった。一方で、自然と継いでくれるようなことになるのが望ましいと考えていた。

### 第3節 小括

三島独活が、最後の1件という消えかけの状況ながら継承されたという事実は、東京うどの継承にも希望となるだろう。三島独活は地域の特産物として愛され、軟化栽培を行う独活小屋は地域のシンボルとして親しまれてきた。またそこでの軟化栽培は江戸時代から続く伝統的なものであった。栽培技術は身体的、感覚的な部分が大きいので N は継承しようがないというが、それは技能としてしか存在し得ないことを言い表している。そうであるがために、N は師匠から栽培の手順や方法は教えられても、一人になったとき同じように作ることができなかったのである。従って、どうやってうまくできるかという技術面は継承できないと言える。では技術が継承されていないとすると何が繋がっているのだろうか。

それは、独活小屋であると考えられる。独活小屋は、前述した通り地域のシンボルであり、そこでは高度な技能を必要とする軟化栽培が行われ、そしてそれは品質を左右するものであった。従って三島独活にとって独活小屋と栽培、品質はセットで存在しているのである。そして継承の際に独活小屋がシンボリックに扱われ、継承の必須条件とみなされることによって、そこに付随する技能や品質は変わらずあり続ける。するとその技能を習得するには身体性が大きく関わってくるため、農家にとって意味のあるものとなっていくのである。また、品質や技能が無形であり、曖昧なものであるのに対して、独活小屋は空間として存在する。従って、継承することを考えたとき変えようがないものとしてあり続ける。つまり、独活小屋は継承財として働いていたと言える。三島独活はコミュニティを作るための一つのツールであると N は考えているが、こういった新しい形にも吸収されながら継承される可能性を示すものである。

---

<sup>35</sup> 大阪府茨木市千提寺は隠れキリシタンの郷であり、N によると良くも悪くも合理的な人が多く、また好き勝手にやっても一緒に面白がってくれたり、見守ってくれたりといった緩さがあるという。それらを隠れキリシタンの風土と表現している。



## 第9章 考察・結論

### 第1節 総括

本論文は、都市農業の制度的位置付けが変わり、都市の中で農地が必要であるという評価が高まってもなお、農地が減少し続けている現実において、農業が残る可能性を考えるために農家に注目した。特に東京うどを栽培する農家の生活や栽培に注目し、農業がマイナーサブシステンス化することで農業が継続し、農地が残るとする仮定のもと、その要因を明らかにすることを目指した。

第2章では、江戸時代から始まるウド栽培の歴史を品種、産地、栽培技術という観点を中心に記述した。江戸時代に吉祥寺周辺へと導入されたウド栽培は、農家の間で伝わり、北多摩地域にスポット的に拡大した。当時の品種は「所沢ウド」という品種で、軟化方法は土を盛るだけの簡単な方法であった。その後戦前までは優良品種が多数導入された時期であり、依然として吉祥寺周辺を中心産地としながら、北多摩地域へとさらに産地が広がった。軟化方法は溝式軟化法と呼ばれる、畑に溝を掘りその中で落葉などの発酵熱によって行うものが主流となった。しかし、戦時中は食糧増産のため嗜好品の要素の強いウドは栽培が減少した。その中で穴蔵軟化法の原型が作られた。戦後すぐの食糧難の時期が明けると、根株を保存していた数少ない農家から出荷が再開され、その希少性から高価で取引された。そして、農業普及員や市など公が関わることで急速に産地が拡大した。また品種は戦前からのものに加え、その系統種や改良種が広がった。軟化法は溝式軟化法に加え、穴蔵軟化法、竪ムロ式軟化法と呼ばれる、地下に穴を掘って行う軟化方法が確立した。その中でも、穴蔵軟化法（ウドムロ）が主流となっていった。さらに、高冷地への根株委託の開始、夏ウド出荷、根株掘り取りの機械化、肥料や薬剤の発達など相次ぎ、生産が拡大した。そして1970年代前半に最盛期を迎えた。しかし1970年代後半から生産量は減少し始めた。この時期に東京都農業試験場は2品種を選抜し維持発展を図り、また軟化施設として半地下施設が開発、導入された。品種については、1900年代前半から肌の白さが高評価を得るポイントになっていた。栽培方法・技術については、促成と白さを求め、ムロも改良され続けてきており、最終的には自然環境からの脱却を果たした。しかし、続いているのは穴蔵軟化であり、技術が意図的に止められたことが示唆された。そして、それは栽培や品質という点において判断がなされたものと考えられる。

第3章では、ウド栽培の中心地である立川市についてその概要、農業、東京うどについてまとめた。立川市は、立川駅を中心に都市化が進む一方で、北部の五日市街道沿いに農業が盛んな地域が広がっている。北多摩地域の中でも有数の農業が盛んな地域であり、東京うどは特産品としての地位を確立している。産地が拡大した要因は多数考えられるが、武蔵野台地上の関東ローム層上にあり、その地質学的特徴からウドムロによって優れた軟化栽培を

することができたことが大きな要因と考えられる。生産量、農家数ともに減少傾向にあるが、都内一の生産地としてさまざまな取り組みを行なっている。

Y を中心にウド農家がいかにしてウド栽培を継ぎ、ウド農家として人生を送ってきたのか記述した。Y は、経済性の高い時期にウド栽培を受け継ぎ、しかしその後苦戦を強いられるようになり、より品質を重視するようになった。品質向上のために長年研究を重ねてきており、特にウドムロに関する工夫が多数見られた。また、明確ではないものの Y には理想とするウドがあり、長年の研究はそのためのものであった。ウド栽培は人生において大きな意味を持っていた。端的にマイナーサブシステム化していた。その上で、ウドをより広く知ってもらうための試みについての語りから、ウドムロで作ることが重要視されていることが浮かび上がってきた。さらに、ウドムロで作ることが他産地に優位な品質を実現する条件として認識されていた、

第5章では、東京うどを作る作業を1シーズン通して記述した。4月から11月に東京では次年度に養成するための種株養成、群馬県では伏せ込むための根株養成が行われた。11月から3月は、東京に戻ってきた根株を仕分け、伏せ込むために芽を調整し、ウドムロに伏せ込んだ。そして、生育を数回確認した後、30日前後で収穫した。ムロに伏せ込む人は決まっており、またムロ内の作業は一人であった。また、収穫後白さを維持するための技術があった。12月から4月は次年度に栽培する種株を準備した。東京圃場でウドの地上部を刈り取り、その後掘り取りを行なった。そして、一芽ずつに割り、殺菌剤処理をした。これら作業は、ある程度数値データをもとにした作業の型があるものの、多くはウドと対峙する事で判断されていた。従って栽培は全工程を通して農家個人の感覚が重視される技能の上に成り立っていた。

第6章では、都市の農業に関する制度の変遷とその中で農業を続けるウド農家の姿を描き出した。都市農業は1950年代半ば以降の住宅需要増加によって市街化が進展した。1991年の改正生産緑地法では、市街化区域内の更なる都市化を進めつつ、30年の管理義務を課して農地を保護したが、都市部に農地としての存在意義は認められていなかった。しかし、都市農業振興基本法（2015）以降、農地の制度的な位置付けは一変し、あるべきものとされた。そして生産緑地の買取申請期間の延長や貸借が可能となり、これまでより農地は残りやすくなったかのように見えた。一方で、農家の間では農地が減少することは「宿命」と捉えられている。その考えに至るのは自分たちの暮らす宅地の相続税によって農地を売らなければならない、現に農地は減っているからである。さらに農地が減ると農業で生計を立てること自体が困難になり、不動産を持たなければならないという現実があった。一方で、東京うどは外部に委託することで農地がなくてもウドムロさえあれば維持できることから、農地減少に強い、都市農業に適した作物であることが示唆された。

第7章では東京うどが立川市内に広がっている様相を、生産とは別視点から捉えた。東京うどをモチーフにした「ウドラ」や非ウド農家 Sn の語りから、立川市の農業としても、立川市そのものを表すものとしても、立川といたらウドという認識が広くされていることがわかった。そして、それを維持するために、立川市は様々な支援や施策を行っていた。また、それらに共通してウドムロが重要な要素として含まれていた。従って、立川市、東京うど、ウドムロが一つの塊として存在していた。

第8章は、東京うど農家が将来へウドを繋いでいくことをどのように考えているか外観した後、新しい形として引き継がれた三島独活の事例について分析した。東京うど農家は、続けていくことが困難な社会状況の中、ウドはなくなってしまうだろうという考えが大勢だった。しかし、歴史や文化、教育といった意味合いから、残していく意思はあり、多くの農家は、共通して集団として活動していくことの重要性を感じていた。一方でそのために後継者が重要であるとし、消極的にはあるが自分の子供が継いでくれることを希望していた。一方で、第三者への継承を視野に入れている農家もあり、実際に大阪では行われていた。大阪の三島独活は、最後の1軒を新規就農したNが引き継いだ。継承で重要であったのは、伝統的な栽培方法と品質であり、その大本には独活小屋の存在があった。つまり独活小屋が継承財として働いていた。

## 第2節 ウドムロという継承財

東京うど農家は、かつて農業で生きていく一つの選択としてウド栽培を始めた。その前は、養蚕やトマトなどの夏野菜、芋類など社会の変化に合わせて換金性の高い農業を営んできており、その一つとしてウドが選択されてきた。しかし、価格の下落や需要の低下などから生産量は減り、生活を成り立たせることも難しくなった。それでも続くウドは、経済性とは別の理由から作られている。

東京うどの栽培は、促成と白さを追求する中で品種や栽培技術が発展してきた。特にムロは新しい方法が何度も開発され、転換されてきた。最終的には施設（半地下式）の開発によって自然環境からの脱却にも成功し、労働環境も改善した。しかし、立川市でのインタビューではそのムロを使っている農家がいるという話は聞かなかった。その施設への転換はあまり起こらなかったということである。すなわち技術が意図的に止められたということができよう。農家の東京うどの品質に関する語りから、そうなった理由は推測することができる。「ウドムロ（穴蔵）で育てている」という言葉とともに、他の産地との比較が行われ、さらに他の地域には作れない関東ローム層を利用したウドムロがあるから高品質なウドができるという認識があるのである。従って、ウドムロで作るから品質が高いと農家たちは考えているということである。

その高品質を実現しているのは、関東ローム層だけではない。Yは長年栽培データを取りながら、ウドムロに様々な工夫を行ってきた。例えば、光が入らないように横穴にはビニー

ルシートをかけ、ウドムロの入り口にはテントを立てるといった具合である。それに加えて身体感覚によるところが大きいウドムロでの作業を行ってきた。この通りやれば良いというマニュアルがあるわけではなく、ウドと向き合う中で栽培における良い悪いの判断が行われている。従って、品質の高いウドを作るためには時間と経験が必要であり、簡単には習得できないのである。

また、特に伏せ込みから収穫までの作業は品質を決める最も重要な工程であるものの、ウドムロの狭さや作業の性質から、農家では決まった人が一人で行う傾向にあり、個人の独断的空間になっていると言える。実際、Yは何十年間ものウドムロ内の作業を通して、今では勘を頼りにしても安定した高品質のウド栽培を実現してきた。これは、個人の感覚が重視される技能の上に品質が成り立っていることを示している。その結果、Yが「まあウドやめちゃうと俺には何も残らねえんだろうなと思ってさ。」と語るように、ウド栽培が人生にとってより大きな意味を持ち、とても重要なものとなっている。だからこそYはウド栽培を継続しているのである。

第1章第1節において、都市農家の収益構造が、農業から不動産、副次的生業から農業にシフトしたことによって、もともとのマイナーサブシステム概念とねじれた構造にある現状があるものの、農業がマイナーサブシステム化することで農業が継続されると仮定した。これをYの状況と照らし合わせると、不動産収入を主収入源としているため、経済性を農業継続の要因と考えるのは難しい。一方で、これまで見てきた通り、Yにとってウド栽培は人生において大きな意味を持つものであり、アイデンティティとも言えるものとなっていた。ウド栽培はマイナーサブシステム化している、すなわちそれによってウド栽培が継続されている。

ではその要因はなんだろうか。それはウドムロであると考えられる。ウドムロは白さや柔らかさといった高い品質を達成できる空間であるとともに、その品質を求めるがゆえに多くの工夫を施し、また長い時間をかけて身体感覚を養っていく空間であった。つまり、ウドムロで栽培することが品質や作業の性質の条件となっているのである。だからこそ、マイナーサブシステムの条件として挙げられるように「当事者にとって意外なほどの情熱を持って」東京うどを続けて来られたのである。さらに過去のYをはじめとする現世代のウド農家が先代から継承した時を振り返ると、継承したのは「ウドムロで東京うどを作ること」であった。従ってウドムロで作ることが継承され、続いているからこそ東京うどの栽培が続いているのである。すなわち、ウドムロは継承財であると言える。

一方で東京うどにはウドムロの他に、品質（特に白さ）、栽培技術という重要な要素があった。これらが継承財でないことは、米村（1999）の議論と重ねてみるとわかりやすい。「家」の存続の議論において、「家」であるかどうかを確かめる際に重要視されたものが家財や暖簾、血縁などの継承財であるとした。品質の判断は感覚的な側面が大きく、またウドというかすかな香りや味を楽しむという野菜としての性質上、東京うどを確かめるには不安定である。また、栽培技術についても前述した通り、個人の技能としての側面が強く確固

たるものがないため判断できない。一方ウドムロは、関東ローム層に掘られた穴蔵であり、そこでウドが軟化されるという誰にでもわかる形で存在している。したがって、ウドムロによって東京うどであることが確かめられる。

これは立川市内の関係者に対するインタビューからも確かめることができる。ウドラの背景にはウドムロが意識され、立川市の小学校の社会科見学はウドムロだった。従ってウドムロは東京うどの継承財であると言える。さらに、東京うどがウドムロで作られるという認識が地域内に広がっていることは、更なる可能性を示すものである。

再び米村の議論を見ると、継承財の有無が血縁を超えた人々をも包摂する「家」として連帯できるかどうかに関わっていたとした。すなわち、ウドムロで作る東京うどという認識が広がることで、東京うどを継承しようとした時、地域全体で連帯できる可能性を大きく高め、またより多くの人を巻き込むことができる可能性を示している。これが実現している例として、大阪の三島独活が位置付けられるだろう。三島独活においても、東京うどでいうところのウドムロ、独活小屋があった。独活小屋は地域のシンボルであり、そこで行われる軟化栽培は伝統的な栽培方法で品質も高い。独活小屋が継承財としてあったからこそ、新しい形として第三者継承することができたのである。

この事例を見ることで、東京うどについても少し希望が見出せるのではないだろうか。農地減少が宿命であると考えざるを得ない現状にあっては、特に後継者への継承を考えることは困難かもしれない。しかし、東京うどはウドムロが最重要な空間であり、農地が小さくなっていても委託などすることによって作り続けることはできる。作り続けることができるということは、そのために少しでも農地を残そうという意思が生まれる可能性も持っている。そういう意味では、ウドムロは都市に最適な継承財でもあるのかもしれない。ウドムロで東京うどが作り続けられる限り、東京うどが継続、そして継承される可能性は担保し続けられるのである。

### 第3節 都市農家によって都市農業を残す

ウドムロが継承財となって東京うどの継続、継承に寄与している姿が明らかとなった。従って、マイナーサブシステム化することで農業が継続し、農地が残っていく可能性を示すことができた。

今回の東京うど農家に関する研究から言えることは、農家の生活や農作業を細かく見ていかなければ、政策などによってさらに農地を減らしてしまう可能性があるということである。例えば重要な役割を果たしていたウドムロを無理やり施設栽培など技術投入を進めていけば、それがきっかけとなって継続できなくなっていたかもしれない。農家の作業には言葉や文章で言い表すのが難しいものも多く、ただわかりやすい言葉として出てくる問題への対処だけをしていても、実際の問題には何の役にも立たないどころか悪化させてしまうこともあるだろう。もちろん、新技術の投入や企業参入などを否定するわけではない。選択肢はより多い方が良いということである。しかし、新しいものこそが全てという風潮があ

る中で、歴史を見返すことや今すでに圃場で農作業をしている農家のもとに行って、その一つ一つの作業を見ていくことは重要度を増していると考え。それは、都市であっても農業が農家によって営まれてきたという事実がある以上、見落としてはいけない点である。また、農地の意向が所有者である農家に委ねられる以上、その農家によって農地が保全されていくことを考えていくことが重要である。今回の東京うどだけでなく、具に農家の観察を行うことで、厳しい現実であっても都市農業が続いていく方法を見つけることができるはずである。

## 参考文献

### 第1章

宮地忠幸, 2006, “改正生産緑地法下の都市農業の動態～東京都を事例として～,” 地理学報告 103:1-16.

農水省, 2016, 都市農業振興基本計画

農水省, 2020, 食料・農業・農村基本計画：我が国の食と活力ある農業・農村を次の世代になぐために

香坂玲, 富吉満之, 2015, 『伝統野菜の今：地域の取り組み、地理的表示の保護と遺伝資源』

甲田亮, 川原晋, 2021, 農家と飲食店、流通事業者の連携による農産物ブランディングの展開：国分寺市「こくベジ」プロジェクトを事例として. 観光科学研究

松井健, 1998, 「マイナー・サブシステムの世界 民族世界における労働・自然・身体」, 篠原徹編, 『民族の技術』朝倉書店

水上亮, 2019, 都市農業研究における都市農家の不在：生活者の日常的実践への着目, 社会学研究科年報 No..26 79-84

飯塚遼, 太田慧, 菊池俊夫, 2019, 都市住民との交流を基盤とする都市農業の存続・成長戦略：東京都小平市の事例, 地学雑誌 128(2) 171-187

唐崎卓也, 2016, 都市農業を支える市民参加型の農業モデルの展開方向, 農業農村工学会誌 84(11)

米村千代, 1999, 『「家」の存続戦略：歴史社会学的考察』, 勁草書房

### 第2章

新宮司丁, 1915, 『古事類苑』「植物部二 草十」(国際日本文化研究センター「古事類苑ページ検索システム」より引用)

橋本周子, 2017, “江戸後期、＜食一通＞の感性をもとめて.” 武庫川女子大学生生活美学研究所 紀要 109-19.

九鬼周造, 2006, 『「いき」の構造他二篇』, 岩波書店

東京うどん生産組合連合会, 1997, 『東京うどん物語：東京うどん生産組合連合会創立四十五周年記念誌』, 農山漁村文化協会

JA 東京中央会, 2002, 『江戸・東京 農業名所めぐり』, 農山漁村文化協会

豊島小百合, 1986, 「武蔵野のうどん」, 多摩中央信用金庫, 『多摩のあゆみ 第四十四号 特集 多摩の産物』

細川充史, 1998, 転機に立つ卸売市場制度, 農業市場研究 11-19.

林政衛, 三輪晋, 1965, 甘藷の催芽育苗法に関する研究, 千葉県農業試験場研究報告 1-23.

白坂蕃監修、豊島小百合著, 1987, 『東京農業記②うどん』

山本勇著, 1993, 『東京農業伝承誌』

大竹通茂, 2009, 『江戸東京野菜.図鑑編』

JA東京中央会,2002,『江戸・東京 農業名所めぐり』

たましん歴史・美術館歴史資料室,2009,『多摩のあゆみ第136号』

立川市,2000,『立川うどん』

立川市,2013,『立川市うどん関連資料集』

立川市うどん生産組合,1995,『独活 二十年のあゆみ』

立川市図書館,2008～2016,『立川民俗16～20号』

立川市教育委員会,1997,『砂川の農家に生まれて』

加賀山国雄,1981,「試験研究体制と農業技術指導事業の改編」,『農林水産省百年史』編纂委員会,『農林水産省百年史 下巻 昭和戦後編』,110-119

渡邊正好,高橋遼吉,1950,「東京都下のうどん軟化栽培」,『蔬菜の促成栽培』,朝倉書店

小糸優華ら,2018,東京都軟化ウドの生産、流通及び消費の実態と生産振興に関する研究  
第3章

立川市史編さん委員会,2020,『新編立川市史資料編近代2』

立川市史編さん委員会,2019,『新編立川市史資料編現代1』

砂川町,1963,『砂川の歴史』

貝塚爽平,1997,『新版 東京都 地学のガイド』

吉田悦造,2016,『多摩地域の歴史地誌：水と生活』

立川市ホームページ（2022年1月9日閲覧 <https://www.city.tachikawa.lg.jp/index.html>）

2020年農林業センサス都道府県別統計書（東京都）確報（2022年1月9日取得  
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=7&year=20200&month=0&tclass1=000001147146&tclass2=000001155386&tclass3=000001161206&tclass4val=0>）

2019年市町村別農業産出額（推計）確報（2022年1月9日取得 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500249&tstat=000001108355&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001108375&tclass2=000001155006&tclass3val=0>）

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file-download?statInfId=000032095985&fileKind=0>）

立川市,1996,立川市農業振興計画：市民とふれあう魅力的な農業地域づくりをめざして

立川市,2005,立川市第2次農業振興計画：市民とふれあう魅力的な農業地域づくりをめざして

立川市,2010,立川市第3次農業振興計画：都市と農業が共生する魅力的なまち

立川市,2015,立川市第4次農業振興計画：都市と共生する持続可能な都市農業

立川市,2020,立川市第5次農業振興計画：農業者と市民が共に育てる立川農業



#### 第4章

農山漁村文化協会,2005,『原色野菜病虫害百科 第2版(6)』

#### 第6章

国土交通省,2008,都市政策のこれまでの歩み

宮地忠幸. 2006. “改正生産緑地法下の都市農業の動態～東京都を事例として～.” 地理学報告 103:1-16.

農林水産省,2016,都市農業振興基本計画

農林水産省,国土交通省,2015,「都市農業振興基本法のあらまし」

農林水産省,2012,「参考資料(都市農地に係る土地利用計画制度について)」

農林水産省,2020,「都市農業をめぐる情勢について」

大石和男. 1997. “若手農業者の職業選択プロセスにみる主観性の問題：長野県中野市の果樹産地を事例として.”

#### 第7章

立川市公認なりそこねキャラクターウドラホームページ(2022年1月16日閲覧 <https://udolla.jp>)

株式会社壽屋ホームページ(2022年1月16日閲覧 <https://www.kotobukiya.co.jp>)

#### 第8章

大阪食べる通信編集部,2020,「大阪食べる通信 第6号 2020年3月」

## 謝辞

はじめに、指導教官の福永真弓先生に厚くお礼申し上げます。何がわからないのか、わからない。そんな状態から私の修士の研究は始まったわけですが、見捨てず、拙い私の言葉を拾い上げながら指導していただいたおかげで、なんとか修士論文を書くところまで来ることができました。福永先生と話すことで視界が広がり、思考が膠着した時に何度も助けていただきました。本当にありがとうございました。

副指導教員の岡部明子先生にも大変お世話になりました。毎回率直な意見をいただき、考えがより広がりました。ありがとうございました。さらに、清水先生にもゼミに参加させていただくなかで、安易に考えていた部分を鋭くご指摘いただきました。ありがとうございました。

福永研の皆様にも本当にお世話になりました。ゼミやその他の時に行ったたくさんの議論は、確実に私の修士論文に活かされています。コロナ禍であまり密にやりとりできなかったわけではありましたが、皆様とのゼミは私にとって楽しい時間でした。ありがとうございました。清水研の皆様にも、ゼミに参加させていただき、たくさんの意見をいただきました。ありがとうございました。

また、東京うど農家の山下明様には大変お世話になりました。援農ボランティアを受け入れていただき、また年間通してウド栽培を手伝わせていただきありがとうございました。慣れない作業でご迷惑をおかけしたこともあったかもしれませんが、農作業は研究であると同時にリフレッシュの時間でもありました。さらに農作業終わりには、ウドや他にもたくさんの野菜をいただき嬉しかったです。ありがとうございました。なお、山下様のお兄さんにも、農作業全般で大変お世話になりました。ありがとうございました。

インタビューを引き受けていただいた、東京うど農家の鴻池様、中島様、宮野様、荻田様、須崎様、立川市農家須崎様にも感謝申し上げます。コロナ禍で不安が大きい状況の中、また急な連絡にもかかわらず、快く引き受けてくださりありがとうございました。皆様へのインタビューは研究に重要なものばかりであったとともに、私の今後を考える上でも刺激になりました。ウドラ作者松尾様、(株) 壽屋の杉田様にも大変お世話になりました。SNSからの連絡にもかかわらず丁寧に対応していただき、またインタビューも引き受けてくださりありがとうございました。立川市役所にもメールにてインタビューをお受けいただきました。ありがとうございました。

大阪府三島独活農家中井夫妻にも感謝申し上げます。2泊させていただきながら、ウドの作業はもちろんのこと、たくさん会話させていただき、とても刺激になりました。ありがとうございました。

このようにたくさんの人にお世話になって修士論文を作り上げることができました。改めてありがとうございました。

最後に、家族の支えは絶大なものでした。本当にありがとうございました。